



Title	中井履軒『華胥嚙語』翻刻・解説
Author(s)	湯城, 吉信
Citation	懐徳堂センター報. 2005, 2005, p. 31-81
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24367
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中井履軒『華胥嚙語』翻刻・解説

湯城吉信

解説

『華胥嚙語』は中井履軒の和文集である。手稿本は十八篇の文章を、『履軒先生和文集』本は全二十篇(末尾に手稿本未収の二篇を付す)を収める。

書名の「嚙」は「うわごと」「寝言」の意。履軒の漢詩集『枕上雜題』序(一七八五)にも「夫夢後眼未開、実与夢為隣、則雖曰嚙語可也」とある。

『華胥嚙語』とは、華胥国という夢の中の寝言(たわごと)を意味すると思われる。実際、三「華胥国記」、一一「夢路草枕」、一六「ねのひ」は夢に関わる話である。『懷徳堂文庫図書目録』に「華胥国嚙語」とあるのは誤りである。また、『国書総目録』は『華胥国物語』の項に含めている(『華胥国物語』の別名として扱っている)のであろうが、両者は別物である。

履軒は安永七年(一七八一)、米屋町に引越し、居宅を華胥国と名づけた。華胥国とは『列子』に見える、古代の理想国である(三「華胥国記」参照)。『華胥嚙語』は自らの想像世界(夢の世界)華胥国で履軒が何を考えていたのかを窺うことのできる貴重な資料である。

内容は、歌論、創作、考証、経世論など多岐に渉る。特に、文芸関係の文章が多いことが注目される。履軒の和文については経世論はすでにいくつかが翻刻または影印されている。すなわち、『年成録』『華胥国物語』*『浚河茅議』『均田茅議』は『日本経済叢書』一六巻及び『日本経済大典』

二三巻(上記書目以外に『恤刑茅議』『懷斥茅議』も)に翻刻され、『老婆心』は『懷徳』二〇号に翻刻され、『有間星』*『遺草合巻』『越俎弄筆』などが『華胥国物語』(懷徳堂文庫復刻叢書三)に影印されている。しかし、文芸関係は『百首贅贅』が翻刻されているに過ぎない(福島理子、徳原茂実『百首贅々・百人一首夷雲』和泉書院(百人一首注釈書叢刊)。以上のような現状に鑑み、本稿では、『華胥嚙語』の翻刻を試みた。

*『華胥国物語』は本来文芸作品に分類すべきだが、理想社会を述べたものであるため経世論と見なされている。

テキストは、手稿本、『履軒先生和文集』本、大阪府立中之島図書館本の三本が確認できる。手稿本は、一「独ふね」から八「巴歌集序」までは整った字で毎葉きつちり九行に書かれており、清書だと思われるが、九「ふきのことば」以降は推敲の跡が多く字も乱れ行数も不定(十十三行)で、草稿だと思われる。『履軒先生和文集』本(以下、和文集本)は、抄者未詳の写本で、前述のように、手稿本にない二篇を末尾に収める。文脈を考え手稿本の間違いを訂正している箇所もあり解説の参考になるが、手稿本の仮名を漢字に直すなど、手稿本と異なる部分もあるので注意が必要である。一方、中之島図書館本(以下、中之島本)も、抄者未詳の写本(中之島図書館には同一抄者によると見られる抄本が多数見られる。装丁などから明治以降の抄だと思われる)。収録する文章は手稿本に同じ。漢字が崩れてい

ないので字の判読の助けになる。手稿本を忠実に写そうとする姿勢は評価できるが、意味を理解せずに形だけ写していると思われる箇所があるので注意が必要である。

翻字は、現代通用の仮名・漢字に改め、適宜濁点を施した。また、台詞には「」を施し、適宜段落を分けた。仮名遣いは原文のままであるが、「ミ」「ハ」「也」「哉」は「み」「は」「なり」「かな」に直し、踊り字（「ゝ」「く」）はひらがなに直した。漢字を当てはめられるものには、該当箇所の右に（ ）付きで表示した。本文にない振り仮名も、（ ）付きで表示した。

目次

一、独ふね（京都行を題材にした随想）	32 頁
二、よこなまり（なまりについての考証）	36 頁
三、華胥国記（華胥国についての記）	37 頁
四、題三夕図（三夕の歌を題材にした絵への題辞）	40 頁
五、ましらのいざらひ（適わぬ恋を題材にした歌物語）	41 頁
六、与竹里翁（『古今集』校訂に関する加藤景範あての書状）	43 頁
七、世のたから（物の値段についての論、 『遺草合巻』一二に同じ）	43 頁
八、巴歌集序（巴歌集（未詳）の序）	45 頁
九、ふきのことば（落についての考証）	46 頁
一〇、歌のすがた（歌論、古ぶりを評価する）	48 頁
一一、夢路草枕（夢での東国行を題材にした歌物語、 富士の考証が詳しい）	49 頁
一二、しのぶ摺（しのぶ草についての考証）	56 頁

一三、しがらみ（恋物語、履軒の女性観が窺える）	58 頁
一四、くれなゐ（恋物語、迷信を暴く）	63 頁
一五、長き夜（随想、履軒の晩年の悩みが窺える）	65 頁
一六、ねのひ（子の日の夜見た夢を題材にした歌物語）	66 頁
一七、歌のすがた（歌論、各勅撰集についての考え、 かすめ歌についての論など）	68 頁
一八、かすめ歌（歌論に歌物語を付す）	74 頁
一九、百首考（『百人一首』の成立についての論、 『百首贅贅』所収）	75 頁
二〇、破腹巻記（粗末な鎧を子孫に遺す理由を書いた記）	79 頁

一、独ふね

* 妻の実家である京都の革嶋家訪問を題材にした随想。妻と子供が亡くなったことも見えることから、おそらくは安永四年（一七七五）頃作であろう。
注参照。

難波津やよしあしのさかひに心とまるにしもあらね
ど、身をうき草のながれよる大江の岸にみやこのかた
のゆかしきおりおりは雪にも花にも剡溪の棹をわたく
しものにしけるを、身のさちすくなくて、めこみたり
うちつつきうせけるうきとし月を隙の駒にことづてや
りぬ。さるは四年あまりまうのぼらですこしぬ。

かのゆかりなる河島に^(主)するが^(方)かたに^(用?)あることありて、卯月の廿八日の夜、河舟してのぼりぬ。^(上)処せく人おほき船なりければ、苦の下にうつぶして身じろぎもせであかしぬ。よもすがら聞こととは、難波のわざをきのよかるあしかる、しづのめおの身を淵に沈めたる、刃にかかりたる、など耳をぞあらはまほしき。淀のわたりすぐるころ、子規の一声おとづれたるに「聞つや」とかたらひあはすべき友だになければ、

一声は あなおぼつかな 梶枕

船のうちさへ 独身にして

ふしみに^(伏見)あがりて、小枝・鳥羽をへて、河島にゆく。かのゆかりの翁さへこの春の比身まかりぬとききたれば、あふさきるさに思ひまどひて道すがら、

久かたの 桂の里に きてみれば

月は小倉の 峰にかくれて

ゆきいたりて門にさしいりてみるに旅のてうどとき

ちらしてすさめくおのこらたちやすらひたる。「たれにか」とおもひつつうちにいければ、まろうどのおきなくみとがめて「難波のせんしやうこそ出きにけれ。われはまだみしらねど、さばかりの人にこそあれ」とおどろかせば、あるじ立出て「さにこそ」とて、ついゐて、うさつらさ世のはかなさなどまねびいづるを、かのまろうど「おそしおそし」とさめけるほどに、ひさしかたにまいりぬたにはに^(参)するゆかりのおきなにてぞありける。ひと年丹波に^(二)いきたりし人々はみな相しれりけるを、この翁なん、その時しも旅にてあらず。めづらしとうちかたらふに、翁の妻もさかづきとりて「庭なる箏おれい給(あ?)すすめよ」などののしる。

とかくするほどに「日やかたぶきぬらん」とまろうどはいでたつを門のほとりまでみおくらんとするを、「いざたまへ」とふたりして手をとりにてゆく。「いなや、けふゆかば、うきことのあらんを」といふを、「老の坂をこゆるばかりをいまだわかき人のなでううきことのある

べき」^(切)とせちにそそのかすに、さすがゆかしき心さへそひて道すがら何くれとかたらひつつ龜山^(至)にいたる。

翁、門の外より「めづらげなるまろうどみせむ」と

ののしりつついるに家のうちこそりておどろきまどひて、舌^(疾)にものうちいふ。そがなかに、ひとりのをうな^(伏)のふしめにてもい^(言)はぬはうせにしももの妹なりけり。

このあたり^(一辺)にすみつきたる。このごろここにきたれるなめり。うきことのかぎり^(憂)とひもやらでた^(問)だうちなみだぐみたる。さらでだに野^(辺)べのゆかりのいかで草葉に露^(露)をかざらん。まいてかのわすれ^(忘)がたみの撫子さへかれ^(地)はてにたれば、めい^(面)ぼくなき心ちさへそひてしばし^(言)ものいはでありぬ。「かのうきことといへるはこれにこそ」と翁も思ひあはすらめ。

「けふ^(今日)このたび^(度)のかへるさ、みやこ^(都)にて高辻すがはらの君の御もとにまいりたる。けふ^(今日)なんうちに」といふ。^(下)^(参)^(急)^(明日)^(下)^(頃)^(頃)^(遠)^(嘆)^(はべる)思ひまうけしことのたがひたるをうちなげきて、侍と

ころの柱にかいつけて帰^(書)りける。

あひみま^(相見)く ほしのやど^(星・欲)りの遠ければ

そら^(空)になくなり 山ほととぎす^(鳴)

このほか^(他)のことはれいのから^(例)さえずりなれば、わづら^(唐)はしくてもらしつ。

【校異】○うちつづき…和文集本「うちつかき」に見える。○のぼらで…和文集本「のぼらず」。○しづめお…中之島本「しらめお」に見える。○あなおぼつか…手稿本は「それかあらぬか」を見せ消ちにして「あなおぼつか」に直す。○ゆきいたりて…中之島本「ゆきいたり」。○門…中之島本「川」。○つらさ…中之島本「つらせ」。○かのまろうど…和文集本「ろ」の横に「ら」と振る。○まろうど…和文集本「ろ」の横に「ら」と振る。○たには…和文集本「た」を見せ消ちにして「に」に直す。○かたらふ…中之島本「かたろふ」。○門…中之島本「川」。○門…中之島本「川」。○うき…中之島本「かき」。○月ごろ…中之島本「月こそ」。○かいつけて…中之島本「はいつけて」。

【語釈】○よしあし…葭芦に善し悪しを掛ける。○わさをき…役者。俳優。○あふさるさに…あれやこれや。○まろうど…客人。○ついあて…坐つて。○まねび…ここでは、語るの意。○からさえずり…唐轉り。漢文のこと。

【注】○剡溪の棹：剡は音「せん」。興に乗じて訪問することを言う。王子猷が戴安道に会いたいと思ひ、雪の夜に船を出し剡溪の彼の家の前まで来たが、興が尽きたので会わずに帰ったという故事が『世説新語』任誕篇に見える。履軒著『洛汭奚囊』所収（『履軒古風』卷二にも所収）の「丙戌仲冬、將北入京、飲別諸友」と題する詩「此別非遠別、何事意惆々、雪裏若相思、長江一夜棹」の転句、結句もこの故事を前提として作られたものである。○めこみたり：妻子三人。履軒は、宝暦十三年（一七六三）に結婚し、明和二年（一七六五）に男子を持った。だが、男子は明和四年（一七六七）までに亡くなり、その後得た娘の鹿も明和八年（一七七二）に、さらに夫人みわを安永二年（一七七三）に二十七歳の若さで失った。さらに、安永四年（一七七五）にはみわの忘れ形見の八郎を亡くしている（加地伸行編『中井竹山・中井履軒』一九三、二〇〇頁参照）。ここでの三人とは明和八年以降に亡くなった三人を言うのであろう。○隙の駒：馬が隙間を通り過ぎる。時間が過ぎるのが早いことを喩える。『莊子』知北遊篇に「人生天地之間、若白駒過隙、忽然而已」と見える。○かのゆかりなる河島：革嶋家のこと。革嶋家は、竹山、履軒の妻の実家。明和元年（一七六四）、岳父が亡くなった際、跡継ぎが幼かったため、竹山が後見人として一年間滞在したこともある。○一声はあなおぼつかない（『続拾遺集』一六二）、「過ぎぬるが山時鳥」こゑのおぼつかなさもはれぬ雲に（『新統古今集』二五九）参照。○たには：丹波。革嶋家は丹波にも土地を持っていた（『国史大辞典』）。○うせにしもの：亡せにし者。安永二年（一七七三）に亡くなった夫人みわのこと。○撫子：撫でし子で、愛児、または愛した女性の意。ここで撫子は、安永四年（一七七五）に亡くなったみわの忘れ形見の八郎を指していると思われる。他、履軒は、子供に対する砂糖の害を力説する『老

婆心』で、「さきくありてわが国におふるなでしこにあはれをかけよ春の雨露」という和歌を詠んでいる。その他、履軒の和歌集『越吟』第二に「妻をうしなへるころ、たかさと（竹里）の翁の歌よみておこせたるかへし」という詞書きのもと「かつみてもなぐさむことは撫子の花にぞ露はをきまさりぬる」（一七八）という歌を詠んでいる。撫子の「なで」に「無で」を掛けていると思われるが、この撫子は妻を暗示するものであろう。○老の坂：老の坂峠。丹波に通じる重要な地点。履軒も歳の老いと掛けて「老の坂のぼらん君が為にとて雪うちかはらひきりし杖ぶり」（『越吟』第三、七〇三）と詠んでいる。○亀山：今の京都の嵯峨辺りの地名。○高辻すがはらの君：公家の高辻胤長のこと。菅原道真の後裔。高辻家には革嶋家が代々仕えていた。履軒は明和三年（一七六六）から一年間、賓師に招かれた。○あひままくほしのやどりの：「ほし」は星を掛ける。「天の原ふるさけみれば七夕の星のやどりに霧立ちわたる」（『新千載集』三三三）では「星のやどり」は星座を表し、「あひままくほしは数なくありながら人に月なみ惑ひこそすれ」（『古今集』一〇二九）では「星」と「欲し」を掛け、程度の甚だしいことを表現する。履軒の歌では、「ほしのやどり」により、大阪の遠いことと、高辻卿に会いたい気持ちの強いことを表現していると思われる。

【解説】明和三年（一七六六）から四年にかけての履軒の京都行がどのようなものであったかについては、湯城吉信『洛汭奚囊』—中井履軒の京都行（『懷徳堂センター報』二〇〇四）を参照のこと。

二、よこなまり

* 言葉の訛りに関する考証。都人も訛ることがあるとする。

言葉のよこなまりてふことは下さまの人、遠つ国は
 さらなり、みやこのうちうへがうへまでも世にしたが
 ひ、ことにふれてあるべし。紫宸を「ししゐ」と読み、
 冷泉を「れいぜい」と読むたぐひをよみくせとなんいひ
 けらし。されどまことはよこなまりなるべし。

草の名を「あふひ」とかければ、いにしへは文字の
 ままに「逢日」とよみけらし。されば歌にも人にあふ
 べき日を葵によせてよめり。今の世にては「青井」の
 ごとよめれば「逢」によすることばにあらず。ある人
 のいへらく、口にては「青井」とよめども文字に「あ
 ふひ」とかく故に「逢日」のことをよすると。かかる
 ひがことこそあれ。そもそも歌とは、うちあけてうた
 ふものなり。それをかいつけてまきたたみするははかせ
 のわたくしごとよりおこれり。ある人のいへるごとく

ならば、あめつちも鬼神もまきたたみたるはかせの文
 を手にとらでは、かむじうごかむこといとかたしや。
 されば、「青井」とよむことよこなまりにあらずや。

また「おもひの烟」などいにしへは「面火」とよみ
 けらし。今のごと「面井」とよめらば、これもまた烟
 のたよりあらじ。およそ「ひ」もじ「い」にかよひ、「ふ」
 もじ「を」にかよふたぐひ、皆みなよこなまりなるべ
 し。

烟草をのむてふことを播磨*の人は「すふ」といへり。
 都人ら聞とがめて「いなか人は烟草をすふとなんいふ」
 とて指さしてわらへば、このいなかうど腹たちて「す
 ふ故にこそすふとはいふなれ。いでや烟管の嘴をのみ
 くちとはいはでなどすひくちとはいふぞ」といへりけ
 れば、都人まけにけり。すべてよき人のいへらんこと
 はたがひたるもめでたきになむ、世のありさまにこそ。

* 以下、双行注。手稿本では白石の話は書脳(のど)に、日向の話は末尾にあ
 る。和文集本は両者とも末尾にまとめる。中之島本は前者を「いにしへは」
 と「面火とよみけらし」の間に挟む。(意味を理解しないまま原文をその

まま写そうとする中之島本の特徴が見える。)

白石「答澹泊書」*曰、「昔公用にて琉球の人に度々出合候き。

此国はふるきものに候。^{*}南倭に有之候へば、本邦の古語もかれこれ遣り聞ゆることに候。大の字をヲホと呼候てヲフとは不申候。^{*}鶯などもウグヒスとよび候て、ウグキスとは不申候。これら^(言葉)のことは古来^(仮名)のかなづけといまよび候との違候事、不審に存候所、^{*}こなたにては語転訛し候故のこと、琉球には昔のままの語と聞え申候。^{*}琉球を南倭と申候事、『山海経』^{*}の南北倭の事に付、先年『南北倭志』^{*}を撰述候事に候。」

日向国飯飽の人のことばに今も人名の「次」の字、「治」の字をよみかへてよぶなり。「次」は「し」^(仮名)のかな、「治」は「ち」^(仮名)のかな、濁りてよべども明かにわかるなり。

【校異】○「おもひの烟」などいにしへは…中之島本はこの後に双行注(白石の分だけ)がある。○候…『新井白石全集』五「て」。○ヲフとは不申候…『新井白石全集』五「ヲフとは申さず候」。○鶯など…中之島本「など」なし。○ウグヒス…『新井白石全集』五「ウグイス」。○ウグキスとは不申候…『新井白石全集』五「ウグキスとは申さず候也」。○かなづけ…『新井白石全集』五「かなづけ候」。○事…『新井白石全集』五なし。○所…

『新井白石全集』五「処」。○には…『新井白石全集』五「にて」○南倭と申候事…『新井白石全集』五「南倭と申候事は」。

【注】○葵…九「ふきのことば」参照。○播磨…中井家は大阪に来る前、龍野におり、竹山や履軒も何度か龍野を訪れている。そのような事情から、播磨の言葉には詳しくあったと思われる。○あふべき日を葵によせてよめり…「ゆき帰る八十氏人の玉かずらかけてぞたのむあふひてふ名は」(『後撰集』一六二)、「我こそや見ぬ人恋ふる病ひすれあふひならでは止む菓なし」(『拾遺集』六六五)参照。履軒自身、「神山のおくの岩ねのあふ日草山賤にのみあふはあふかな」という歌を詠んでいる(『越吟』第一、五一)。○あめつちも鬼神もくかむじうごかむ…『詩経』大序に「動天地、感鬼神、莫近於詩」とあり、それを踏まえて『古今集』仮名序にも「天地を動かす、目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ、…は、歌なり」とある。○白石「答澹泊書」…『新井白石全集』五、国書刊行会、一九〇六、三〇九頁「白石手簡」に見える。○『山海経』…中国古代の神話と地理の書。卷十二「海内地経」に倭が見える。○『南北倭志』…未詳。『国書総目録』に見えない。

三、華胥国記

* 華胥国の様子を表した記。履軒は安永九年(七八二)(本文から冬らしいことがわかる)、米屋町に引っ越し、居宅を華胥国と名づけた。華胥国とは『列子』黄帝篇に見える、黄帝が夢で遊んだとされる無為自然の理想国。なお、『繫帯統編』に漢文の「華胥国記」がある。こちらは居宅の具体的描写がなく簡潔。

いにしへの大江の岸のわたりにかたつぶりのかくれ
がをわがものがほにすめるは、安永のみかどの季のとし
になむ。この小路をよねてふ名たてすめれど、あらぬ
ことにて、まことは南の本となん。されど、笠置の帝
の御夢のうらにはあらざりけらし。

よもぎのとほそいとせばく、藜藿のおひいづべきま
だになし。とよりみれば、人のすむべくもあらずかし。

されど、おくはややふくらかなむ。北おもての格子
あけて文みる窓とさだめつ。薦かつらはひわたるばか

りの庭もせなれど、もとすみける人の植置たる松梅や
まぶきなど、そこらしどけなきものから、此君なくて

はひと日しもとて、やをら植たれど、冬の半なれば、
みどりの髪も霜とふりつつ、千年のちぎりそらごとと

なりぬ。

北山にすめる友人の牡丹、卯の花とてをくりたるは

あけの年のきさらぎなりければ、よくありつきて、ほ
どもなく牡丹はさきにけり。卯月のもちはすぐれど、

うの花はいまだいぎたなきをうちわびつつ立やすらふ
夕暮に雲井はるかに一声おとずれければ、

まつとしもあらで植にし 卯花の

ひもとかぬまに ほととぎすなく

さて日ごろへて咲いて、たるあらぬ物にぞありける。

うたて世中にかかるためしのおほかるをおもひつづけ
てそれとはなくて、

わすれ草 たねまきつれど 春雨に

おほるものとは 鬼のしごくさ

その東のすみに方丈のむろあり。いまやうのもてあそ

びなる茶室なりけり。この道はたどりしらぬことなれ

ばゑしももてはやさず。それながらにて昼のめんざう

とさだめつ。かの趙盾のうるさきをここにのがれむため

ならし。さればかくれすむ山のおく山にや。卯月のはじ

めより時々はこころみにとてもものするもあしくはあら

ずかし。

この北むきの窓のうへに額うちて義上窓といふ文字をしらつちにてつくれり。窓よりさしのぞきてみれば東へりのまがきの下に白菊ひとむらふたむら植へわたしたる、いとこころにくしや。

この室のいりぐちに「華胥国門」といふ額うちたり。

「これは」とみる人ごとに「あやし。かかるちいさき

国やはある」といふ。こたへていへらく「かの軒轅の

みかどの夢のうちに遊びたまひしはここにこそ。夢の

うちに大小のけぢめはあらじものを」と。また酒のみ

などしける時はこの国のあるじかほに胡蝶の夢もさめ

やらず、南の枝ぞすみかなどいまやうめかひてものぐ

るほしう、まひうたひける。もとより夢てふものはさだ

かならぬたとひにさへいふなる。すべてこのむろに

いりてこの窓の下におれば、いふことすることゆめな

らぬことはあらじ。

かくかいつけて「華胥国の記」と名づくるもおなじ

く夢にこそ。

くつのきのふかうど夢のうちにしるす。

このとしのくれにや、この国あるじのよめりける歌。
夢のうちに 時しもわかぬ わが国も

春を隣の 鶯の声

あけのとしのはじめに、

あきつすに 春やきぬらし 草枕

夢路かすみて けさはみゆらむ

【校異】○安永のみかど…中之島本目「安永のかかど」。○南の本…中之島本「南の花」。○そこら…中之島本「そこそ」。○やをら…中之島本「やをに」。○そこらこと(空事)…中之島本「ろうこと」？に見える。○北むき…中之島本「ふむき」。○あやし…中之島本「おやし」？に見える。○いりて…中之島本「いりし事」？に見える。○けさは…中之島本「けさの」。

【語釈】○そこら…はなはだ。○しどけなき…整わない。○いぎたなき…咲いていない。○ひもとかぬ…つばみが開かない。○鬼のしこくさ…鬼の醜草。『万葉集』の「鬼の醜草」の誤読から生まれた語。紫苑のこととも言うが、ここでは雑草の意か。○あきつす…秋津洲。日本のこと。

【注】○かたつぶり…ヤドカリのように居所を定めなことを言う。履軒は「おきふしを心にまかす蝸牛のやがてけぬべき世ににあるものを」という歌を詠んでいる(『越吟』第二、三三五)。また「家なくしてかたつむりをかりてすめることよと笑ふ人ありければ」という詞書きも見える(『越吟』題三、八一)。一方、『莊子』の「蝸牛角上の争い」の故事を踏まえ、

浮き世であくせく生きることを皮肉る意もあると考えられる。履軒の漢詩

「蝸牛巨図」は、華胥国王が蝸牛の大きさを称え、蝸牛角上の二国を訪問するという内容である（『履軒古風』巻四）。○よね…米屋町のこと。○南の本…米屋町の別名、南本町のこと。○此君なくてはひと日しも…此君は竹のこと。王微之が居宅に竹を植えて「何ぞ一日も此の君無かるべきや（どうして一日もこのお方がなくておられようか）」と言った故事（『晋書』王微之伝）に基づく。○笠置の帝の御夢のうら…「笠置の帝」とは後醍醐天皇。南北朝時代、笠置山には後醍醐天皇の行在所があった。後醍醐天皇が楠を暗示する「南の枝」の夢を見た話が『太平記』巻三に見える。○趙盾…『春秋左氏伝』宣公二年の条に、趙盾が主君の靈公の贅沢や遊興を諫めて疎まれた話が見える。○かくれすむ山のおく山…「世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」（藤原俊成、『百人一首』）などを踏まえると思われる。○義上窓…義皇上人で伝説の皇帝伏義のさらに先の皇帝。世事を忘れて安逸に世を送る者に喩える。○「華胥国門」の額…懷徳堂文庫には「華胥国門」の額が残されている（『懷徳堂事典』一〇一頁、『中井竹山・中井履軒』二二二頁に写真あり）。○軒轅のみかど…軒轅は伝説の皇帝黄帝の名。○胡蝶の夢…『莊子』齊物論篇に見える故事。莊子は夢で蝶になり、覚めた時、人が夢を見ていたのか、蝶が人の夢を見ているのか分からなかったという話。○南の枝…唐代伝奇「南柯太守伝」を指す。柯は枝の意味。夢の中で、蟻の国の若殿様となった男が南柯国を治める。目覚めて南の枝の下を掘ったら、蟻の巣があり見覚えのある景色だった、という話。『華胥国物語』の舞台設定も華胥国の南柯郡になっている。

【解説】履軒の庭園に関する文章に「小園記」「小園序」（ともに『弊帚』所収）がある。宝暦九年（一七五九）、門人が懷徳堂の庭を造成した事情を

述べる文章である。

四、題三夕図*

* 三夕の歌を題材にした絵への題辭。履軒の視点が興味深い（解説参照）。

春ののどけさを鳥にうたはせ、秋のあはれを虫になげ
（歌）
かするはあめのみかどのはからひかも。されば世々を
（天）
へて秋の夕てふやまと哥は浜のまさごのよみつくすべ
（天和）
うもあらねど、深草や露けきむしのねにかよひたるは
（虫）
いとまれにこそ。
（補）

ただこの三人のみぞひだたくみのをののあともなく
（辺）
野べのちぐさのおのづからおひ出たらんやうにて、そ
（千草）
の声なむまことにむしなりけらし。むべおほくの中よ
（実）
りゑらびいだされけめ。
（虫）
（遠）

かくいひもてゆけば、ひとへにうべなきやうなれど、
（言）
そも人にして虫ならんはあながちにねがふべきやは。
（今）
いまのよはいふかひなし。末遠き後の世のみぞ人はは
（世）
かられね。
（甲斐）
（多）

たぞやむしのねぐら^(雌)をたちはなれて天雲のたな引^(雄)
わたりて入日のひかり^(光)にそのいろいろをそめいたし、
嶺^(高)たかみ松^(吹)ふく風の秋のしらべをかきならしたらんは、
虫もやさしとくちふたぎてかくれまどひなんかし。そ
れはたありや、あらずや。

【校異】○哥…中之島本「歌」。○三人…和文集本は右に「哥」と振る。
○虫…和文集本「むし」。

【語釈】○うべなき…最上の。○やさし…遠慮して。

【注】○三夕…『新古今集』に見える秋の夕べを題材にした三首の歌。「さ
びしさはその色としもなかりけりまき立つ山の秋の夕暮」(寂蓮)、「心な
き身にもあはれは知られけりしぎたつ沢の秋の夕ぐれ」(西行)、「見わた
せば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ」(藤原定家)。○浜の
まさこ…『古今集』仮名序に「わが恋はよむとも尽きし有磯海の浜の真砂
はよみつくすとも」という歌があるのを参照。○いまのよ云々…未来を予
想するものか。○天雲のたな引わたりて…「天雲たなびくまで生ひのぼれ
ることくに、この歌も、かくのごとくなるべし」(『古今集』仮名序)を踏
まえるか。

【解説】魂の飛翔

履軒は自然科学に興味を持ち、天文学者麻田剛立と交流し『天経或問』

に訂正などを書き入れたり(『天経或問離題』)、木村兼葭堂の門下に顕微
鏡を見に行き「顕微鏡記」を著したりした(『弊帚統編』)。一方、華胥国
に代表されるように夢の世界に心を馳せた。自然科学への興味と夢の世界
への興味とに共通するのは、その自由自在な「視点の移動」である。すな
わち、ある時は、微小な世界に心を馳せ(「顕微鏡記」、ある時は巨大な
世界に心を馳せた(履軒の漢詩集『履軒古風』巻四には、天を飛翔する夢
を描いた「会虞―觀天地第一」なる創作もある)。ここで、虫の視点を問
題にするのもその一例と言えようか。

五、ましろのいざらひ*

* 適わぬ恋を題材にした歌物語。題の「ましろ」は猿、「いざらひ」は稽古
の意。猿まねの下手な作品だと卑下しているのである。

昔^(昔)かたりなどはみなあらぬことを筆のすさみにかき^(書)
つらねたるをいまの世^(今)しもいかでつくりいでざらんと^(作)
人のいへりければ戯れに、^(言)

むかし^(昔)おとこありけり。かりそめによばひわたりた^(後道)
る女の日比^(こゝろ)ふるほどにかたみにへだてなく思ひなり^(互)
ぬ。おやなん聞つけて「げすなり」とていみじうせい^(下巻)
^(親)

しける。関守かどかどしくたちふさがりければ、ゑ
いかで^(行)ありける。風のたよりに^(便)つけて、かくなむ。

かよひなれし^(通) 宿はさながら^(賃) * ちかけれど^(近) *

人は雲井に^(離) 遠ざかりぬる

をんなかへし。^(女)^(返)

白雲の^(外) よそにもわれは^(我) 思ひわび^(往)

くゆる烟を^(煙) それとしらなん^(短)

ほどへて、いひおこせける。親のしみて人にあはすな^(経)^(言)^(遣)

る。「こよひなん、しかあるべき」とてかなしきことの^(今宵)^(奥)

かぎり、しどけなくかきつづけておくに、^(限) * ^(書) ^(奥)

世中に^(憂・浮) かかるうき身の^(荒磯・有りぞ) *
ありそ海と

しらでや人の^(短) 恨みはつらん^(奥) *

おとこかぎりなうあはれにおぼえて、^(男)^(限)^(返)

世の海を^(何) なにかうらみん^(恨) 数ならぬ^(短)

身をしる雨ぞ^(知) はるる時なき^(晴)

夜ふくるまに、いもねられず、いとしのびがたくて、^(更) * ^(寝)
みそかにいひやりける。^(密)^(言)^(遣)

思ひ出ん^(令) 涙の床に^(越) 波あれて^(荒)

いまやこゆらむ^(令) 末の松山^(越) *

いまだおきぬたるころなりけり。からうじてたてまつ^(起)^(頃)
りける。をんな文を顔におしあてていたうなきていら^(女)^(押)^(当)^(甚)^(逆)
へもせずとなむ。あけの日きけば、にはかにむなし^(明)^(閑)
なりけるとぞ。はしたなきわざにやありけむ。^(空) *

【校異】○いかで…中之島本「いそ」に見える。○ちかけれど…中之島本
「ちりけれど」。○恨みはつらん…中之島本「恨みはへらん」に見える。

○いも…和文集本「いと」。

【語釈】○すさみ…勢い。○さながら…すべて。○しどけなく…整わずに。
○むなし…亡くなること。

【注】○ありそ海…荒磯海。歌枕。「ありそ」を「有りぞ」に掛ける。ま
た「ありそ海の浜の真砂と頼めしは忘るることの数にぞありける」(『古
今集』恋五、読み人知らず)のように数の多いことを導き出すのに使われ
ることもある。ここでは恨みの尽きないことを導き出すのに使われている

か。履軒の恋歌を集めた和歌集『風懷百首』一六に「ありそ海の岩またゆたふなびきものなびくとみえて手にはとられず」という歌がある。○思ひ出んの歌：「契りきなかつみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは」『百人一首』、清原元輔を踏まえる。

六、与竹里翁（竹里翁に与ふ）

*『古今集』校訂に関する加藤景範あての書状。加藤は懷徳堂門人であるが、歌人でもあつた。

『古今集』の初校はおきなのおほせにてぞ、たどりしらぬ道（（随）（分））をふみわけつる。されば罪（（妄））うべきこととなげきつ（（書））つも、みだりに（（妄））かいつけたることのおぼつかなさ。（（此度））こたびの再校もおほせにはあれど、わたくし（（私））の心には（（先））さきのみだりがはしきものをほとほと（（取））とりすてて罪を（（整））かるめてとてなん、さらばとは思ひたちぬるを、心に（（任））まかせぬものはかいなにて、いやましにかいつくるほどに、罪はいよふ（（深））ふかくなりまさるを（（如何））いかかはせむ。よしや、みそなはして後にかいやりたまへ。（（生））おひしげ（（音））るあし（（一節））のひとふしも罪あるまじうおぼさん（（音））ことのあり

もせば、あなかしこ、名をのぞきてとりいれたまはらんかし。数ならぬ名（（立））たてしてもこそいとびんなけれ。（（難波））なにはのこともみぬさき（（先））によしとは思はざらまし。（（見））みんひとのためさへいとおしくこそ。（（惜））

【語釈】○みそなはして…ご覧になつて。○かいやりたまへ…捨ててください。○びんなけれ…「便無し」で具合が悪いこと。

【解説】この文章によると、履軒は『古今集』の校訂をしたようだ。履軒は、『古今集』に『古今六帖』との字句の異同などを書き入れた『古今集雕題』を残しているが、あるいは『古今集』校訂のための書き入れ本か。また履軒には古今序について論じた『古今二微』という著作がある。

* 山中浩之は、この文章を、竹里が履軒に『古今集』の校正を命じたものとする（『中井竹山・中井履軒』二七五頁）。

七、世のたから

* 世の中の物の値段に関する論。贅沢品を退け実用品を尊ぶ履軒の価値観がよく現れている。『遺草合巻』にもあり、見せ消ち、挿入があることから草稿だとわかる。

世中のた（（宝））から、時により処によりて貴賤あるは（（数））かぞ

ふるにいとまなし。

おしなべていふに、^(言)いますこし^(少)価のいやしくあらましかはと思ふものは、あかがね。^(銅)家ごとに用ゆとはすれど、いまだ銅の用をつくさず。また、しれものにぬすみ心つくよ。かかるたからを年々に遠き^(遠)ゑびすにわたし給ふまつりごとはいかにぞや。こがね、しろがねはたくまれ、^(賤)いやしくまれ、^(賤)にはかなるのぼりくだりだになくば、さてありなん。ゑびすにわたすもかへりておしからず。ま綿。木綿に十倍すればまどしき者のはだにふれがたし。^(老)おひ人のなげきにもや。

価のよきほどなるものは竹。家ごとに用ひていささかのことに^(思)も此君なくてはとぞおもふ。まことに竹の用はつくせり。紙、墨、筆、木わた、^(絶)すゑ物、刃物。ふるき茶の具、^(少)太刀、刀はいざしらず。塩、酒、^(鉄)くろがね。

いますこしたとくあらましかはと思ふものは、^(辛子)からし、^(辛子)唐からし、^(蜜柑)柚、^(蜜柑)みかむ、^(蜜柑)はちかみ。あまりに得やすければ下が下までも口にあき目になれてかばか

りのものにめづる心うすし。杉まるた。^(丸太)これも目なれ^(愛)てめでやらす。いと^(惜)おしきわざなり。とくさ。たとし^(愛)とて用ひぬかは。今は功たかくて位おとりたりや。いすの木。から木とてまれなるをめづるは世のならひにや。およそ木のうちに、^(唐)から木に似たるはただいすなめり。いかなれば、この国の人のこれをめでざる。くし、^(根付)ねつけの外には用ひぬこととすめり。されば、薪にたきすつるぞ、いと^(焚)おしき。

いとたとくあらましかはと思ふものは、麻黄、石膏、^(煙草)玻瓈、^(煙草)たばこ。さらば、まどしき者、^(知)此味をしらで^(嬰)おのづから火災もすくなかるべし。黒砂糖。さらば、みどり^(少)子の病もすくなかるべし。このふたつはありて何の益ぞや。なくてもあらなむ。

【校異】○用ゆ…『遺草合卷』は「用ふ」を見せ消ちして直す。○給ふ…『遺草合卷』「玉ふ」。○まつりごと…『遺草合卷』は「まつり」は挿入する。○かへりて…『遺草合卷』は挿入する。○とぞ…『遺草合卷』は「ぞ」は挿入する。○ふるき茶の具…『遺草合卷』は挿入する。○くろがね…『遺草合卷』「鉄」。○下が下…『遺草合卷』「下がしも」。○までも…『遺草合

『巻』は「も」は挿入する。○もの…中之島本「との」。○功たかく…『遺草合巻』「功高く」。○まれなる…『遺草合巻』は「すくなき」を見せ消ちにして直す。○およそ…『遺草合巻』は挿入する。○ただ…『遺草合巻』は挿入する。○たきすつ…『遺草合巻』は「す」を見せ消ちにして直す。○麻黄、石膏、玻瓈…『遺草合巻』は傍らに足す。○此…『遺草合巻』は挿入する。○病も…『遺草合巻』は「も」は挿入する。

【語釈】○此君…竹の別名。○はちかみ…生姜、および山椒の異名。

【注】○いす…炭にもされたらしい。炭としても安物だった（『近世後期における 主要物価の動態（増補改訂）』三井文庫編、東大出版会、一九八九）。○たばこ…履軒はたばこは体に悪いとは考えていなかった（『老婆心』）。○黒砂糖…当時、黒砂糖は薬としても使ったらしい。砂糖自体安いのではなかった。ただし、履軒は体に悪いと考えていた（『老婆心』に詳しい。『遺草合巻』所収の「柔遠」にも見える）ため、人々の手に入らないように、さらに値段を上げるべきだと考えたのであろう。

【解説】履軒は儉約主義と鎖国主義（貿易縮小論）を唱えていた。儉約主義については、『華胥国物語』を、鎖国主義（貿易縮小論）については、「柔遠」（『遺草合巻』所収）、「利政雜議」（『擬諭』（『履軒贅言』所収）、「蝦夷辨」（新田文庫蔵『履軒先生遺稿雜集』所収）にそれぞれ見える。

八、巴歌集序

* 「巴歌集」は未詳。『国書総目録』に見えない。

ふじの烟もたえて久しくなり、ながらの橋も尽はて
にたる世にしあれど、みそぢひともしのことのはのみ
はくれ竹のよよにつたへて、浜の真砂のよみつくすべ
くもあらず。

けだしくも、青民くさのうまれかはり、おひかさな
れども、心のたねの常磐にうきなき世のためしかも。
やけ野のあとの草わかみ、もえいづるみどりの色ぞ目
もはるになびきあひぬる。風のたよりに思ひおこせば、
この草はよし、かの花はわるしなどいふめるは世の中
のくすし心にや。

とまれかくまれ、雨露のおなじめぐみにおひ出くる
ものをひとりふたりの心もて、難波のよしあしをあらそ
ひてんやは。さらばうめは香をもてさけ、桜は色をさ
け、ゑびは味をたてまつれ。くれ竹はみさほをたてよ。
われはよそに見む。

【校異】○もえ…中之島本「もへ」に見える。

【注】○ふじの烟く尽はてにたる世：『古今集』仮名序に「今は富士の煙も立たずなり、長柄の橋もつくと聞く人は、歌にのみぞ心を慰めける」とある。長柄橋は、早くになくなり、古いもの、壊れたものとして歌に詠まれてきた。履軒の恋歌を集めた和歌集『風懷百首』に、富士山の煙を詠った歌として「わが思ひ身をする雨にきえもせでふじの烟のもえつつぞふる」(二四)と「いつまでぞならぬ思ひはふじのねの烟も今は絶にしものを」(三六)とがあり、長柄の橋を詠った歌として「わが契ながらの橋のくちはててうかりしふしぞ猶残りける」(七九)がある。○涙のまさ：『古今集』仮名序に「わが恋はよむとも尽きし有磯海の浜の真砂はよみつくすとも」という歌があるのを参照。

九、ふきのことば

* 落についての考証。同様の内容は、『履軒先生富貴之説、莫説(月可録)』(新田文庫『履軒先生遺稿集』所収)、『莫説』、『画機』にも見える。

ふきてふ草こそいとけうあるものなりけれ。ひとた
(落) (興) (種) (渡) (生) (統) (絶) (一度)
びうへわたせば、年々おひつづきてたゆることなし。
(選) (垣根) (音) (丸屋) (通)
土地のゑらびもなく賤がかきね、あしのまろやのめぐ
(生) (通)
りまでも、むつかしきばかりおひ広がりて、朝夕もの
(尽)
すれどつくすべくもあらずかし。葉も花も香味よく、
(嬰)*
みどり子の葉にさへたぐひなしといふめり。さるをよ
(類) (言)

の常(目)にめなれてめでさ(愛)はぐ人のなきぞいと心(憂)うきや。

落(字)の字を用ゆるをひがことなりといふ人あれど、『倭

名抄』に崔禹錫が『食経』を引て落を「ふふき」とよみ

たれば、さるべきことにこそ。「ふふき」は「ふき」の

(声) (伸) (半) (萌) (一本) (必) (言)

冬(半)のなかばにもえ出るにはひともとに葉はかならず

みつあり。茎(二)ひとつに葉ひとつなれば、三茎草ともいふ

べし。人(一)一葉をつめば、のこるふたつのあいだよりま

た一葉出(三)てみつの数は長くかけずなん。久しくつまざ

ればよつにも五つにも葉はなるべけれど、みつなん其

常なるべし。

其葉(並)のならび(重)かさなりあひたるは人の軒端(基)をふき

ならべたらんやうなればにや、「ふき」とは名づけけら

し。ふきてふ名に文字をあてて「富貴」にかけば、まこと

にめでたき草なりと思ふべし。富貴は福なり。福の音

は「ふく」また「ふき」の読にかよひたれば、「福草」とよび

けらくもむべならずや。また「福草」を「さきくさ」とよめ

り。「さき」はさちなり。げにも「さき草のみつばよつば
の殿つくり」にはよくかなひぬべし。むかし三茎草を
たてまつり人に三枝部連の姓を賜はりしも、この草な
るべし。三枝は三茎なり。茎と枝はもと其かはりあ
れど、かつかよはして用ゆめり。一枝の蓮、一枝の灯
など、から歌の常なり。「神祇令」に三枝祭あり。「義解」
に「三枝花もて酒樽をかざる」といへり。冬枯に木草
の花のまれなるころなれば、この草の花なるべし。三
枝を「さいくさ」とよめるも「さき草」のよこなまり
なるべし。

もろこしのむかしはこの草を「葵」と名づけたり。

ここには「あふひ」と訓ぜり。葉をひろげて日にむか
ひ、やや日にしたがつてかたぶきめぐりつつ、わが根
をおほひて日にあてず。されば葵は足を衛るといひつた
ふ。日にむかふ草ともいふなり。中ごろとなりて、こ
のことはりをうしなひて『本草』てふ文にも葵の名を
あらぬものにとられてけり。さていふやう、むかしは

葵を民のくひものにしたるをいまはくふ人なし。口に
も腹にも今昔のかはりありなど、いとかた腹いたしや。
この国にも賀茂の祭のゆふだすきかくるあふひを葵な
りと思ふはひがごとくにぞ。山のつたかつらの中に葉の
かたちの葵に似たればとてなん、「あふひ」の名はこれ
にのこりたるなり。まことは「あふひかつら」といふ
べし。日にむかひ足をまもるてふことはこのかつらに
はかつてなきことなり。やまとももろこしも草はむかし
の草ながら、世にしたがつて名はかはりゆくめり。か
かるためしの世におほかるはなげきてもなをあまりあ
るべし。

かくわれひとりものしりがほにさかしらするをにく
しと思ふ人もあるらん。されど、また、さかしらの名
をうしとて人々はひかくれて、いはでの山のいはでやみ
なば、ひがことは日にましておひまさり、ふるきこと
は年にしたがひてきえうせなん。これをかなしとみん
人あらばわがさかしらはゆるしぬべし。いでや、かく

さかしらはすれど、この外に今(種)くさのこりたること
のあるを、なを世をはばかりてなむ。

【校異】○みどり子…中之島本「ことり子」。○なるべけれど…手稿本「なるへへけれど」。中之島本「なるべへけれど」。和文集本に従つて改める。
○名づけけらし…中之島本「名づるけらし」。○ならずや…和文集本なし。
○かたぶき…中之島本「かたなき」に見える。○あらぬものに…中之島本「あらぬものぞ」。

【注】○『倭名抄』…『倭名類聚抄』卷十七にある。○みつばよつばの殿つくり…「この殿はむべも富みけりさきくさの三葉四葉に殿造りせり」(『古今集』仮名序)。履軒にも「このもとに一夜のやとをさきくさのみつばよつばに殿造りせり」という歌がある(『華胥国歌合』雑、僧)。○三枝部連の姓…天武紀十二年の条にある。『姓氏家系大辞典』二四四四頁(角川書店、一九六三)○一枝の蓮、一枝の灯…用例未詳。○「神祇令」「義解」…『令義解』卷二「神祇令」に「三枝祭…三枝の花を以て、酒樽を飾り祭る。故に三枝と曰ふなり。(以三枝花、飾酒樽祭。故曰三枝也。)」とある(『国史大系』)。○『本草』…明李自珍著『本草綱目』卷十六。○いはで…磐手。歌枕。「言はで」と掛けて用いられる。

十、歌のすがた

* 歌論。

やまと歌にも昔の姿あり、今の姿あり。(大和) いかなる処
よりかくはわかれきにけるにやと思ふに、昔の人は心(分)
に思ひよりたることを其ままに引ませたることなく、
さながら、うつくしも、やさしくも、いひあらはすな
めり。されば、ことばのひややかにてかたくなしから
ず、ただ一筋にして数々の飾はなし。けだし心の種(萌)
りもえいでることの葉なればにや、うち聞たる耳にも
さはやかにして心あまりあるやうなり。これなん昔の
姿なるべし。それをよしとはみながら、「いかでかくう
つくしくいひいでん、いかでかくやさしかるべき」と
のみ心をいれてとかくするほどに、数々のかざり物
をとりあつめて巧をそへていひならぶるより、今の姿
とはなりけらし。『中務の日記』にいへらく、「こよな
う霧もふりまさりて、木々の梢も見へわかず、かすめ
る空にかりなきわたりてあはれもそへておもしろけれ
ば、

霧こめて あはれも深き 秋の夜に

雲井の雁も 鳴わたるかな^(度)

この歌は今の姿なり。このはじめの五もじをかりて前の詞にうちあはすれば、さながら昔の姿となりぬべし。

霧こめて 木々の梢も 見えわかず^(種)

かすめる空に 雁なきわたる^(應)

又この第四句を「かすめる月に」とあらためば、一きは
おもしろき歌とはなるべし。されど、歌のおもしろくて姿はくんだりゆくならん。そもそも歌のよしあしなどは難波の浦に年へし田鶴はかへりて見しらぬにしも。ただその姿の昔今のかはりあるをかかるたぐひにもやとしるしおくなり。

* 以下小字。

ここに今といへるは昔にむかへていへる今なり。その今はた
だいまよりみてはまた昔をいふべし。昔の今より今の今にいた
りて今てふ罪はますますふかくなるべし。

【校異】○思ひよりたること…中之島本「思ひよりたぞこと」に見える。

○引ませ…和文集本「引まき」。○耳…中之島本「年」。○ある…中之島本「やる」。○それ…中之島本「みな」。○なりけらし…中之島本「なりけふし」に見える。○そえ…中之島本「そへ」。○見え…中之島本「見へ」。○そもそも…中之島本「色々」。○みては…中之島本「みんに」。○いたりて…中之島本「いたりては」。

【注】○心の種くことの葉…『古今集』仮名序に「和歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける」とある。○『中務の日記』…『中務内侍の日記』。

【解説】履軒は古ぶりを評価する。それは漢詩においても同じであった。詳しくは、『履軒古風』『履軒古韻』解題を参照のこと。

一一、夢路草枕

* 夢での東国行を題材にした歌物語。富士山についての考証が詳しい。

うば玉のやみにまどへる老らくのいづれの月いづれ
の日にかありけん、都をいづるとて、

旅衣 けふたちそめて 草枕

ふじのすそ野に いつかむすばん

関の明神にて、

君が代に (達) あふ坂山は 関もなし

(行) ゆくもかへるも (掃) 神のまにまに *

粟津原にて、

草枕 月になれにし (萎) 袖だにも

(龜) さらにやもろき (栗津) あはづ野の露

鏡山のふもとにて、

われもまた (我) いざ立よりて (寄) 鏡山 *

(蘇) 昔の人の 影やのこると *

老その森にて、

はしおりて (若) わかやぎゆかむ (蘇) あら玉の

(蘇) としをおひそと (老いそ・老蘇) 森のいさめし *

(伊勢) いせの瑞籬にまうでて、 (詣)

(仰) あふぐかな (照) 天てる神の 守るらし

(天) あまつひつぎの (日嗣) ひかりたえせぬ (絶)

何事の おはしますとは 白露の *

(惠) めぐみあまねき (遍) いせのかみかき (伊勢) (神垣) *

二見の浦をながめて帰るとて、 (眺)

老の波 立わかれなば (別) 玉くしげ (御箭)

(二見・蓋身) ふたみの浦の (合念) あふたのみなし (頼)

(何処) いづこなりしや、 (音) 田子の子らあしをかりうんじてむれ (群)

(休) ゐてやすみおりける年いそぢばかんなるすぎやうしや、 (五十) (誦経者)

(旁) そのかたへの松のこかげにゐてしめやかに誦経したる。 (木陰)

其形は露霜にくちにたれど、 (朽) (顔付) つらつき (清) のきよげにて、

ゆへゆへしくみゆる。 (見) (一人) ひとり (音刈) のあしかりおのこ紙と筆 (男) *

をもてきて「いとたうとくも見えさせ給ふかな。 (持) (老) (草) 賤が

身の世の海をわたりかねたる。 (渡) 仏のみわざだにさらに (御業)

もなしあへず。 (良) かかれば後の世のおぼつかなさをいかが (如何)

はせん。 (教) 何にてもよきことをおしへしめしたまへ」と (示)

てぬかをつくなり。 (頼) かの修行者、

後の世は (迷) まよはばまよへ (迷) 難波津の*

あしをかりつつ (列) 世をつくすべし (尽)

とかきてやがてそこをたちさりぬる。 (立) (去) いかなる人にや (如何)
ありけん。八橋といふ処にて、

かきつばた 咲にし津は 橋もなし

(蜘蛛手) くもでに思ふ * 昔なりけり *

在五中将の像をおがみて、

花やくち (朽) 春や千年を (経ること・故事) ふることの

その身ひとつは (二) なをのこりける (残)

(小夜) さやの中山は (富士の峰) ふじのねを見そむる処のやうにふるき道 (古)
の記などに (見) みえたれど折ふし空かきくもりてなん。な (曇)
をゆきゆきて、 (何処) いづこにかありけん、 * 夜のまに空はれ (間)
ければ、 (明) あくるをもまたで旅の宿を出て (去) 浜つたひあゆ (歩)
みけるに、 (分) 横雲のわかるるひまよりふと見 (出) いたしたる (言)
はえもいはず。

あはとみる めもあやしきや 麻につく

蓬がみねの (蓬) 雪のあけぼの (曙)

雪のころにはあらねど、 (短) 時しらぬ山なれば罪なくや。
(裾) すそ野をめぐりゆくほどに、 (巡) (朝) (見) あさ夕みざる日もなし。

あふぎこし (仰) (来) (題) (滴・三) ねがひもみつの 高根かな

しなぬ薬は (死) さもあらばあれ

げに人の口ばかりおそろしきものはあらじ。 (惡) * かかるみ山 (御)
をもひきつみて大海原のあなたになげやりすてたらん (種) (投) (捨)
やうになん、あるかなきかと今の世までもうたがはせ (疑)
けるぞ、名のみなりけることとはいひながらも、いと (言)
かたはらいたしや。 (片腹痛)

よしもなき 人に見えじと * 沈みけん *

(三) みつの高根は (三) たうとくもあるか (尊)

そらごとの中にもあしうはあらぬ一ふしはありけりと (空言) (愚) * (節) *
なん思ひ給ふるなるべし。 (唐) (昔) (寒) もろこしのむかし、はたの

みかど(帝)のころ(頃)にやありけん。大海原(海)をこぎわたりし者(渡)の
 みい(見出)でたるにや、このみ山を名づけて、中なるを蓬
 萊山(言)といふ、一かた(方)を瀛洲山、またひとかた(一方)を方丈山
 といふ(言)めり。いかなる心にか、このみつ(三)の山は仙人の
 すみ(住処)かなる神山にて不老不死の薬のおひいづる処なり
 となん。まこと(一)はひとつ山なるをばしらで、はるかな
 るな(眺)がめに、山のみつかさなりそびへたるとなん思ひ
 けらし。秦皇これをきこしめして、まこととおぼして
 方士(一)にみこと(詔)のりして、かの薬をもとめさせけるに、
 年を経て手をむなしうして帰りまうできぬ。秦皇に奏
 してまうさく「臣らかの神山をめぐけて舟をこぎよせ
 て嶋(上)にあがれば、この山浮世の人にはみえじとにや、
 するすると海の中にしづみてたづぬべくもあらず。舟
 にかへりて沖に漕(漕)いづれば、もとのごとくみゆ。また
 ゆけば、またしづむ。いくたびもおなじさまなり。こ
 れ(全)またく臣ら戒行のつたなき故にこそとなん。いつは
 りおほき方士のことばなれど、またくよしもなきこと

をつくりかへりて出たるにしもあらず。遠ければみゆ、
 近ければ物にさはりみえぬといふこと(一)はりをさしおき
 て、海に沈むといひけんはいとおかしくこそ。わが国
 にては人皇第七代孝靈天皇の御宇にやあたりぬらん。
 この時は富士てふ名だにありしやあらずや。まいて、
 歌などに入たるはいと後の世のことなめり。もろこし
 にては、めにみぬ山をはやくよりから歌にも文にもかき
 ながしける。漢の武帝もかの薬をもとめさせたり。唐
 の玄宗の時には楊貴妃のことにつけて蓬萊仙宮をぞか
 こちける。又三島てふ(一)ひがことも出くめり。その外の
 くさぐさは浪にみだれし藻塩草(種々・草々)かきあつむべうもあら
 ずかし。いでや、かかるめでたき山の御名をかしづき
 まいらせて、さらにまた蓬萊が島などいひさはぎて、
 むくつけき鬼のすむ海のあなたのさかひなりといひ
 つたふるこそ、いとくちおしけれ。
 また世に名だかき博山香炉は、梁の昭明太子のいと
 おしみける物とぞ。これは玉もてつくれり。其かたち

は後の世までもうつし伝へたれば、それを見しに、す

なはち富士の山の姿なりけり。みつの峯の間より香の

烟のくゆり出るやうにゑりなせり。ひとつの名は富士

山炉といふなりと物に見えたり。これはむかしのこと

おぼろげにはあらでまことよく見さだめてつくりけら

し。さればこの山をはるかに名づけて博山ともいひけ

るにぞ。げにはたばりひろき山なれば、この名もむべ

しこそ。

かかるよしなしごとを思ひつつけつつゆくに、都に

のぼる人にはしなく行あひたり。みしりたる人にてあ

りければ、この歌ひとつたつ立ながらかきつけて、

ふる里にことづてやりける。其おくに、

さのみやは ことばにのべん ふじの雪

きくともいかで みるにおよばん

この夜のやどりは何とかいひし鐘のねに目をさまして、

はばひろき 山の裔野の 草枕

夢さへゆらに 山めぐりして

さてねられざりければ、枕おしやり、ともし火ひき

よせて都いでしよりのことを家づとにとてかきくづし

ける。ことはてて、ふたたびねたるに、こたびはいぎ

たなくて、日影のさしいるをもしらでなん、ふとおき

いでて見れば、あやし、なにはのわがまるやにてぞあ

りける。さればみな夢なりけり。たとひ夢にてもあれ、

まさしく筆とりてしるしけるものをとて、ほとほと

ねんじいだして、かいつけてみれども、はつかに十が

一になん。

母屋の柱にかきてありける長歌。

はるくると むかふそなたや なみちわけ

かすみて出る はつ日影

くわの小枝の なびきあひて

あまねく照す よろづ国

そのもとづゑを たづぬれば

あきつむしとぶ 天の原

日のいづるてふ^(世) 日のもとや^(本)*

おひずし^(老)なずの^(死) 葉^(生)おふる

蓬^{*}の山の^(懐) なつかしきかも

反哥^{*}。

偽りの^(無) なき世なりせば^(昔) むかしへや

桑も蓬も^(誰) たれかつみてむ^(種)*

これは、もろこし^(唐)人のよみけるや^(大和)ま^(言)と歌なりとぞいふ

なる。はたさらにいつはり^(偽)にてぞあるべき。いかなる^(如何)

もののわざにや、足たゆく^(解)、いたう^(甚)こうじにたれば、^(困)

酒^(飲)のみなどして、やがて^(伏)ふしぬる。

【校異】○冒頭部…手稿本は「旅衣、ふと思ひたちて、東路におもむく。」を見せ消ちにし、横に「うば玉のやみにまどへる老らくの」とある。和文集本は、見せ消ちの部分を残して冒頭に置き、「うば玉の」以下を続ける。○やみ…和文集本「闇」。○まどへる…和文集本「まどへる」。中之島本「よへる」。○老らく…中之島本「老らく」。○いづれの日…中之島本「ひつれの日」。○旅衣…和文集本「たび衣」。○ゆく…和文集本「往」。○あはづ野…和文集本「粟津の」。○鏡山…手稿本「みてゆかん」に傍線を引き「鏡山」と書く。和文集本「みてゆかん」。中之島本「鏡山」。○おひそ…中之

島本「おひろ」に見える。○いせ…和文集本「伊勢」。○まうでて…和文集本「詣て」。○白露…和文集本「しら露」。○かみかき…和文集本「神かき」。○浦…和文集本「うら」。○その…和文集本「其」。○其形…和文集本「そのかたち」。○つらつき…中之島本「つらつき」。○おのこ…手稿本は「叟」を、和文集本は「おきな」を見せ消しにして直す。○紙…和文集本「かみ」。○給ふ…和文集本「給ふもの」。○たまへ…和文集本「給へ」。○山なればくゆくほどに…中之島本は「罪なくや」が「めぐり」の後にある。また「めぐり」が「めぐりつつ」となっている。手稿本の挿入を見誤ったか。○昔…和文集本「むかし」。○なを…和文集本「猶」。○ありけん…和文集本「ありけむ」。○出て…和文集本「いでて」。○見…和文集本「み」。○は…和文集本なし。○あさ…和文集本「朝」。○口…和文集本「くち」。○あらじ…和文集本「なし」。○見えじ…和文集本「みえじ」。○沈みけん…手稿本「沈みにし」を見せ消ちで「沈みけん」に直す。和文集本「沈みにし」。中之島本「沈みけん」。○あらぬ…手稿本は「思はれ」、和文集本は「おもはれ」をそれぞれ見せ消ちにして直す。中之島本は「あらぬ」。○原…和文集本「はら」。○者…和文集本「もの」。○たる…和文集本「ける」。○処…和文集本「ところ」。○まことは…中之島本「まことには」。○おぼして…手稿本は「思ひ給ひて」を見せ消ちにして「おぼして」に直す。和文集本「思ひ給ひて」。中之島本「おぼして」。○粟…和文集本「くすり」。○帰りもうできぬ…和文集本「かへりまうできぬ」。手稿本、和文集本は挿入で補う。中之島本「帰りぬ」。○しづみ…和文集本「沈み」。○かへり…和文集本「帰り」。○漕…和文集本「こぎ」。○故…和文集本「ゆへ」。○またく…中之島本「また」。○てかへりて…手稿本は挿入で補う。中之島本なし。○あたりぬ…中之島本「あたる」。○なめり…中之島本「あめり」。○から歌にも文にも…和文集本「文にもから歌にも」。○かこちけ

る…和文集本「らこちける」。○出くめり…中之島本「出にめり」。○藻塩…和文集本「もしほ」。○いひさはぎて…中之島本「いひさはれて」。○博山香炉…中之島本「博山香煙」。○いとおしみける…中之島本「いとおしみたる」。なお、手稿本はこれを「秘蔵せし」に棒線を引いた横に書く。和文集本は「秘蔵せし」の後に、中之島本は「秘蔵せし」の前に置く。○其…和文集本「その」。○うつし…和文集本「移し」。○たれば…和文集本「たり」。○なり…和文集本なし。○見えたり…和文集本「みえたり」。中之島本「見えたる」。○されば…和文集本「かかれは」。手稿本は見せ消ちで直す。○かかる…中之島本「かかり」。○はしなく…中之島本「はしなく」。○立ながら…和文集本なし。○ふじ…和文集本「富士」。○きく…和文集本「聞」。○およばん…和文集本「およばむ」。○やどり…和文集本「とまり」。○ね…和文集本「音」。○裔野…和文集本「すそ野」。○ゆら…中之島本「ゆう」。○よせて…和文集本「よせ」。○家づとに…和文集本「家づと」の後に「の料」を挿入する。中之島本「に」なし。○見れば…和文集本「みれば」。○まろやにて…和文集本「まろ屋にて」。中之島本「まろやにてて」。○なりけり…中之島本「なりけりな」。○なん…和文集本「なむ」。○母屋…中之島本なし（空格）。○かきて…和文集本「かきつけて」。○はる…和文集本「春」。○こなた…中之島本「そなる」。○なみちわけ…和文集本「波路わけ」。中之島本「なみちわ」。○小枝…和文集本「さ枝」。○なびきあひて…中之島本「なびきあひと」。○照す…和文集本「てらす」。○もとづゑ…和文集本「もとづえ」。○たづぬれば…中之島本「みぬれば」。○天の原…中之島本「天津空の原」。○いづるてふ…中之島本「いづるこふ」に見える。○日のもと…和文集本「日の本」。○葉…和文集本「くすり」。○蓬…和文集本「よもぎ」。○つみてむ…手稿本、中之島本「つまらし」と「つみてむ」を併記する。和文集本「つままし」。○反哥…和文集

本、中之島本「歌」。○いつはり…和文集本「偽り」。

【語釈】○あまつひつぎ…天つ日嗣ぎ。天照大神の系統を受け継ぐこと。

【注】○「君が代に」の歌…逢坂は歌枕。「これやこの行くも帰るも別れつつ知るも知らぬも逢坂の関」（『後撰集』一〇八九、『百人一首』）を踏まえる。○「われもまた」の歌…鏡山は歌枕。「鏡山いざたち寄りて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると」（『古今集』八九九）を踏まえる。○「はしおりて」の歌…老蘇は歌枕。「変わりゆく鏡の影をみるからに老蘇の森の嘆きをぞする」（『金葉集』五九九）を踏まえるか。○あしかりおのこ…謡曲に「蘆刈」という作品がある。難波に住む夫婦が貧窮のため後日を誓って別れ、妻は京都に上る。妻はやがて、貴人の乳母となり、従者を伴い夫を尋ねる。そこで蘆を売る男と会う。女は夫だと知るが、夫は零落の身を恥じ姿を隠す。やがて歌を交わして名乗り合い、共に都へ上る。という話である。本文はこの芦刈伝説を意識したものである。○かきつばたの歌…『伊勢物語』第九段に「そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける。」とあるのを踏まえたもの。○在五中将…『伊勢物語』の主人公とされる在原業平のこと。○ふるき道の記…未詳。富士がよく見える場所とされているのは田子の浦（『歌枕歌ことば辞典』角川書店、一九八三）。履軒も自身の『百人一首』の注釈書『百首贅々』の「たこの浦にうち出てみれば…」に「コ、ニ至マデハ丘陵ニ隔テラレテ富士モ未ミエザリシニコノ浦ニ出テ初テ富士ヲ打望タルハエモイハズ面白キナリ」という注を附けている。○麻につく蓬…「麻の中の蓬」は良い人の感化を受ける喩え。『荀子』勸学篇の「蓬は麻の中に生じ、扶えずして直し」に拠る。○蓬萊山、瀛洲山、方丈山…

司馬遷『史記』始皇本紀に見える。○蓬萊仙宮：白居易「長恨歌」に「昭陽殿裏恩愛絕、蓬萊宮中日月長」とある。○博山香炉：梁の蕭統（昭明太子）に「銅博山香炉賦」がある（『昭明太子集』卷二）。なお、懷徳堂遺物に履軒が自ら作つたという（『懷徳堂考』下七九頁）染焼きの博山香炉がある。富士山の形をして頂上部が三峰に分かれている。蓋と身に分かれ、蓋の上部には香の抜ける穴が開いている（蓋の上部前後部に穴が各一箇所、前部（正面）には線上の切れ目が三箇所。一番上の線上の切れ目は穴と繋がる）。サイズ：蓋：縦一六・五cm×横二六cm、高さ一〇cm。身：縦一三・五cm×横二二cm。身に蓋を被せると約五mm浮く。口絵参照。なお、『画鑑』にも博山香炉について同様の記述が見える。

一二、しのぶ摺*

* しのぶ摺に関する考証。しのぶ摺の語源は、人目をしのんで密かに染めたからであるという。同様の内容は『百首贅々』の「陸奥のしのふもちすり」…の歌の注にも見える。

蕨に似たる軒の釣草を「しのぶ」と名づけたるは世のさがなめり。ひとつ葉似たるふるき軒ば、垣のうへなどにおほる草を「しのぶ」といふは『和名鈔』このかたさだまりたることなれど、摺にはなんなしや。

陸奥信夫郡より、いにしへ、この布を貢せしといふ

はあとかたもなきそらごととかや。しのぶ郡にて石の面にてすりたりといふもひがことなりときく。軒のしのぶ草の形をすりたりといふはこの解説になやみて、いろいろ思ひめぐらして、やうやうになひいだしたることにこそありけれ。そも児のわがくつの底なすものを、何の見どころありて、衣の紋にすりなさんやは。されば、このくさぐさは、皆しのぶ摺には用なし。引つかねて西の海にながしやるべし。

かのしのぶ摺てふものは、かつて草の名によりたることにはあらずかし。すべてきぬを染むるには色の汁を壺にたたへてきぬを漬ひたして色をなすを「染」といふ。板の上にきぬをしきて、木草の葉にまれ、花にまれ、其上よりおさへてすりつけて紋をなすを「摺」といふ。おしこめていへば、皆「染」なり。今の世に華布を染るは「摺」なれども「摺」とはいはぬにてしるべし。是よりは、おしこめて「染」もていふべし。

いでや、狩衣は礼服ならね、行幸、御幸などの御供

につかうまつるには、ことに引つくるひて美をつくし
てかざる(飾)ことなり。其外、襖、齋会なども晴がましき
あたりはみな(皆)しかなり。若草摺、遠山摺などくさぐさ
の名おほくあるべし。もとより格式なき服なれば、花
にまれ、鳥にまれ、よろづよろづ思ひに染出すことな
り。かかるわざは其板にかたをちりばめ、あるは紙を
たたみて形をきざみ、又、糊を用ひなど、これを身のわざ
とする人ならではの、なしゑがたしや。(得難)

内わたりには染殿あり。染坊あり。親王、大臣の家
などは其まねびもあるや。かるき公達、殿上人などは、
いかでさるまうけのあるべきやは。おほやけの儀式に
つきてこそ、きともていでて染坊などにてそめけれ、
わたくし(私)の狩衣は家どうじ、女わらはべの手まさぐり
にてことすむべし。いとむつかしげなるわざはあらず。
かたよ、糊よとひしめくことはなく、ただ色よき草木
の花や葉をとりて、おしふせてすりつけそむることな
れば、青き赤き黄なる紫うちまじりてみだれにみだれ

ぬべし。花もさかず、鳥もとばず、この葉の形だにも
なし。その染坊などにもていでず人にもおほせず、た
だわたくし(私)にみそかにそむる故にぞ「しのぶ摺」とは
いふなりけり。今の世にてはかかるわざを「手染」と
なんいふめり。哥(うた)にてしのぶにみちのくをかうぶらせ
たるは、若紫に春日野をかうぶらせたとおなじかる
べし。

もじずりとは其みだれのねぢれもぢれたるをいふな
り。文字にあらず。されどこれはむかしより人のいへ
ることなれば、めづらしからずとて、ここにはもら
せるなるべし。

【校異】○ひとつ葉…和文集本「に」を挿入し、「ひとつ葉に」にする。
○おほる…中之島本「おほけ」に見える。○和名鈔…中之島本「和名抄」。
○ならぬ…中之島本「ならぬ」。○つかうまつる…中之島本「つかうまつ」。
○とは…和文集本「と」。○哥…中之島本「歌」。

【注】○しのぶ…陸奥のしのぶもじずり誰ゆゑに乱れむと思ふ我れなら
なくに(『古今集』恋四、『百人一首』参照。○『和名鈔』…『和名類
聚抄』卷二十に、「垣衣。『本草』云、垣衣、一名鳥蕒。和名之乃布久佐」

とある。○若紫に春日野をかうぶらせたる：『伊勢物語』第一段に「春日野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限りしられず」という歌が見える。

一三、しがらみ

* 恋物語。履軒の女性観が窺える。『老婆心』手稿本(卷子本)にも「しがらみ」が附されている。ただし、これは後人の抄である。仮名と漢字の違いが多数見られる他、言い回しが違う箇所が若干ある。本稿の校異では、言い回しの違いのみ挙げた。その他、新田文庫には「しがらみ」がある。天生(中井木菟麻邑)の跋が別紙にて附されている。校異は省いた。

筑前守なりける人よき子をもてり。^(持)次郎なりける。^(良)
よろづのことにざへたかし。^(才)ことに文の道には妙にし。^(高)
て、武のわざにたけたり。^(技)もろもろかれが師たる人、^(長)
みとせの後は、みな文簿をささげてかれが弟子となり。^(三年)
ぬ。みなかにはよき友なければ、しばしとてみやこに。^(田舎)
のぼりける。^(主)年ごろ誉れはたかしめづらしとて、公達
などあまたとぶらひきて、文つくり歌よみなどよるひる。^(数多)
となうつとひしに、ややこうじにたるや、はた心にな。^(無)
ふ友もなかりけるが、一月ばかりして心地そこなへり。^(集)

とて、引こもり居て、ひとり文よみて、人には見えざりける。^(籠)夕つかたには、いつもわらはべつれて、ここかしこにふるき跡どもをたづねて、独ありきをなんしけり。^(方)

ある夕ぐれ、御溝水のながれをたどるたどるのぼりいきけるに、時雨ふりたり。^(暮)かたはらなる軒のしたにしばし立やすらひしに、築ひぢの内より、もみぢ葉おほくながれ出たり。^(多)みなかには見もしらぬいと大きやかなるこの葉の火のもゆるやうなる、めかれもせず、ながめあたるに、其中の一葉に文字あるやうに見えたれば、杖もてかきよせて見れば、歌なり。^(眺)

紅葉ばのながれの末よ、いかならん
さだめなき世の淵瀬かなしも

うちかたぶきて思ふに、「これは君の寵あるきにはあらじを、とらはれ人のごと心ならずとどこめられてわが身の行末をふかうなげきたるにもや」とそぞろにあはれなり。又其手のいみじさはいはんかたなし。「みやこ

のをん^(女)なはかくまでなら^(尊)ひゑたるにや」と目もはなれ^(離)ず、おき処^(處)はなし、やをら^(押)おしの^(枕)こひて、ふところ^(懷)にいれぬ。さらに外の一葉をひろ^(拾)ひて、みづから歌^(書)かきて引^(包)つつみ、築^(地)ひちの蔭^(歩)にあゆみより、かの崑崙山^{*}とおぼしきあたりになげ^(投)いれて帰^(入)りぬ。その歌は、

御溝水^(みかはみづ) しがら^(掃)みかけて まちて^(待)見む

そのもみぢ葉^(紅葉)の ながれ^(流)よるやと

とかくするほどに世中穩かならず、みやこには東宮^(皇)のさはぎい^(出)できて、国々もつはもの^(兵)おこりぬ。かうの殿^(解)は任^(上)とけてのぼらんとするに、俄かにやみふしてそこ^(上)にうせ給^{*}ひし。このかみは主上の御供^(兄)につかうまつり^(奉)て、あふみの国にときこゆ。こはいかにせんとて、まづ母^(上)うへを山深き寺にかくしつ。年ごろ祈の師なりける房なれば、是は心やすし。今は独身になりたれば、「いでや都のやうをもうかがひ^(獲)みん」とて、いとしのび^(忍)てのぼりぬ。桂川のわたり^(渡)しるべなる家^(導)に忍びおりけり。かかる時^{*}しもれい^(例)のしのび^(忍)ありきはやまざりけり。

ある日北山寺にて仏名^{*}しけるに、いきてあひたり。さてここかしことながめ^(眺)ありく。あふきるさの中に、ひとり^(一人)のをん^(女)なきぬ^(衣)ふかう^(深)かつきて、次郎があとに^(後)さきにつれ^(先)だちたらんやうにぞありける。「あやしや、みやこの内には相^(知)しれる人もなきを、年ごろわか^(聞)けれ、あだし心もたねば、こととふべき女あらんやは」とは思ひつつ、「もし人たがへならばそれとつげまほしう、なを^{*}かれ^(彼)よりもものいふ^(言)まで」とねんじてあとにつきてゆくめり。かれはたかへり^(彼)みがちに、北野の森過^(す)るころは日もくれ^(暮)かかり、人けもなかりければ、ねん^(念)じわびて「やや」とよびとどめて、「みもしらぬ人の、なぞやかへり^(顧)みがちにしたまふらん。門たがへたまは^(通)んは^{*}びん^(便)なかるべし。おのれをば誰と見給ふにや、か^(片端)たはしあ^(明)かせ^(言)せたまへ」といふに、女かほうちあ^(赤)かめ^(片端)て、「卜部にはあらず、いかでしらぬ君が名をさしでんや。みづからは人を尋るものにてさむらふ。されば、かく人おほ^(多)きあたりは物ぐるほしう、ひとり^(一人)たづね^(尋)めぐ

りさむらふなり。」「それはかほかたちいかさまにおは
しますにや。名を何とたづぬべきにや」といふに「さ
ればとよ、名も知らず、影だにもみぬ人に心をくだく
にてさむらふよ。」「しからば、いかで何がしをみしり
たらんやうにはしたまふぞ。」「けふなんおほくの人を
見そなはし給ふるに、ひとりおことのみよく物をみいふ
べく、いと心ありげに見えさせたまふ。なをかかる友
千鳥もはたすくならじをひたすらにうち出てうたへ
奉らんとてなん、しばしば立どまりはしたりけれど、
いかにせん、おほくの人のつつましきになん」とう
ちそむけていふ。

次郎いよあはれに思ひなりて、「それはなにをか
たづねくさにはすべき。玉のかんざしにてもあらば、
かたりいでたまへば、さらば命をかきりに宮つかへな
し奉らん。」「かんざしはなけれど、ただ御溝水のし
がらみとたづねたまへ」といふ。

次郎是を聞て、きと胸にあたりてければ、「それこそ、

いとしもやすき。まず御心をのどめて待たまへ。さら
ば君はいちしやう流れの末のみぢ葉よ」などいひけ
れば、をんなうちおどろきて、「あやし。いかでかなし
き淵瀬をしろしめしけん。あらふしぎや」とてさしう
づぶき、さらに物思ひのそひたるけはひぞする。

やがて、「其しがらみをゐ(給?)て奉らんにはいかば
かりの宮づかへをしたまはんや」とうちほほゑみていひ
ければ、「あな、はづかしや。いはでの森にはひかくれ
まほしきを、かの時より神仏に願たてたるやうは、た
とひ鼻はかけたりとも、かた目蠣を吐いだしたりとも、
老かがまりてゑひなすとも、ただこのしがらみを引あ
はせたまへ。いかなる蘆のまろやにもはひいりて其北
の方とならんと、よるひるちかひにしものを、いまさ
らにつつまかくすべくもあらずかし。また、人わろし
とてもいかにこのちかひを露そむくべきや」といと心
清くいひけり。

次郎はたあはれまさりて、ふところより、かのもみぢ

葉をとり出して、「(如何)是はいかに」といふ。女は膚の守りをときてし(解)がらみ(播)をいだしたりけり。「さてはうたがふべくもあらぬあめつちの神のむすびさだめたまひし契なりけり」と、次郎は始めて心ときめきしけり。をんなはうつし心もなく土のう(現)へにたうれふして、ただなきになきゐたり。(逆)としごろの願(年頃)忽(おがむ)にかなひ、まのあたりしがらみにかかりたれば、神仏のかたじけなさに心さはぎして、玉のちりうせたるにぞありけらし。「うれし。たのし」などはいまだ思ひもかけずかし。(抱)といだきおこして裾の砂はらひ、きぬ引あけて袖して涙おしのごひまいらせたるに、弓張の月影にかがやきて、たぐひなうきよらにあてやかなり。そこら草葉の露とりて口にいれなどするほどに、玉のかへりきませるにか、やうやう人心つきたり。はやうちとけがほにゆうゆうと肩の上により(依)かかりたるはゑもいはずらうたげなり。

「さらば、ただちにゐていぬべし。君がやどりにて

尋ねまどひやはせぬ。(意)はらからはむつまじくて心ばへ(良)よかりけれど、みづからがあまりかたくなにて人のいひ(良)ごとをききいれぬとて、はらたちて、『いづこいかなる(似非男)ゑせおのこなりとも、このかたくなをぬすみていねかし』などむつかれば、一日ふた日みえぬとてさしもたづぬるまではあらじを」とて、次郎に手をひかれて、かのしのぶの宿にいたりぬ。(忍)「ふる郷の宿の妻がたづねのほりしに、はしなく行あひてゐて来りし」など、こしらへければ、あるじことの外によるこぼひて、さまざまに心を尽してかしづきすえたり。

四五日ありて、氏長者より使者参れり。「北国の凶徒誅罰のため丹波丹後の軍勢三千余騎召寄せたれ共、当時諸方の手つかひに因て、大將に事をかきたり。武略の誉れあらんもの閑居逸遊の時節にあらず。且は君に對し奉りてその懼れあるべきものをや。急ぎ馳下りて、一方平均の功を励むべき者なり」と御教書くだれり。(みぎようしよ)

この日、上野掾になりてやがて打立けるが諸処の戦

に利を得て、いく程(幾)もあらぬに北国(北)ことごとく撃平ら(平)げ、それより東国(東)にむかひてみち(陸奥)のくまで撃したがへて帰陣せり。其後また西国南海(西)におもむき、度(毎)ごとに大功を立たりければ、だむ(段々)だむ昇進して、三位右大将になりて、世のおぼえ(並)ならぶものなし。かのもみぢ葉(紅葉)もよきしがらみにかかりて右大将の北の方と仰がれ、はら(同胎)からもろともに榮耀(榮)にほこれり。おの子もみはし(持)らもてり。よろづ心ゆく御溝水(みかはみづ)にてぞありける。およそ女は、心あだあだしからでまこと(誠)のふかきぞ何事にもま(勝)さるべしとかや。

【校異】〇もてり…『老婆心』附録「もてりける」。〇には…中之島本「は」なし。〇かれが…和文集本、中之島本「が」なし。〇文簿…『老婆心』附録「名簿」。名簿(みょうぶ)は、弟子入りする時に師匠に渡す名札。〇かれが…『老婆心』附録なし。〇めづらし…中之島本なし。〇となう…『老婆心』附録なし。〇もなかりけるが…和文集本「となりけるが」。中之島本「もなかりけり」。〇心ならず…『老婆心』附録なし。〇いできて…『老婆心』附録「いできたり」。〇国々…中之島本「国に」。〇うせ給ひし…和文集本「みを給ひし」。中之島本「うせ給ひ」。『老婆心』附録「うせたまひぬ」。〇なりける房なれば…『老婆心』附録「の房なりければ」。〇かかる時…中之島本「かか時」。〇仏名…和文集本「仙名」。〇あふきるさ…『老婆心』附

録「にあふさきるさ」。〇年ごろ…中之島本「年こそ」に見える。〇ならば…『老婆心』附録「ならませば」。〇なを…中之島本「なぜ」。〇つきて…中之島本「つれて」に見える。〇たまはんは…『老婆心』附録「はばいと」。〇びんなかる…中之島本「びんなる」。〇おはしますにや…中之島本「おはしまけにや」に見える。〇心ありげ…中之島本「心あたりげ」。〇はたすくならじ…手稿本「おほかるべき」を見せ消ちして右に「はたすかなからじ」と書く。中之島本も「はたすかなからじ」と見える。和文集本は「か」を見せ消ちにして「く」に直す。ここでは、和文集本に従う。〇けれど…和文集本「けんど」。〇たまへば…『老婆心』附録「たまへ」。〇やすき…『老婆心』附録「やすき事なれ」。〇しろしめしけん…中之島本「しろしめけん」。〇其しがらみ…手稿本、中之島本「しがみ」。和文集本は右に「ら」を補う。ここでは和文集により「ら」を補う。〇したまはんや…手稿本は「は」が「ふ」に見えるが「ハ」だと思われる。和文集本は「ふ」を見せ消ちにして「は」に直す。中之島本「したまふんや」。『老婆心』附録「したまふらむや」。〇かた目…『老婆心』附録「かた目は」。〇老かがまりて…『老婆心』附録「腰は老かがまりて」。〇にも…『老婆心』附録「なりとも」。〇あはれ…中之島本「あつれ」に見える。〇うたがふ…中之島本「かたがふ」。〇しがらみに…和文集本「しがらみぞ」。〇かけずかし…『老婆心』附録「かけざりけらし」。〇はらひ…『老婆心』附録「うちはらひ」。〇月影…手稿本、中之島本「目影」。和文集本によって「月影」に直す。〇そこら…手稿本「そこら」か「そこに」か不明確。和文集本「そこら」。中之島本「そこに」。〇かたくな…中之島本「かたけな」に見える。〇あまり…『老婆心』附録なし、下の「人の」が「あまり人の」。〇いひこと…和文集本「いひこと」。〇ふる郷…中之島本「ふるさと」。〇しに…『老婆心』附録「たるに」。〇よろこびて…『老婆心』附

録「よろこぼて」。○尽して…中之島本「つくして」。○たれ共…中之島本「たれども」。『老婆心』附録「たりといへども」。○かきたり…『老婆心』附録「かきぬ」。○あらんもの…和文集本「あらんもの」。中之島本「あかんもの」に見える。○諸処…中之島本「諸所」。○いく程…『老婆心』附録「いまだいく程」。○おもむき…『老婆心』附録「おもむく其」。○しがらみに…中之島本「しがらに」。○おの子…『老婆心』附録「おの子」。○ふかきぞ…中之島本「ふかきに」。

【語釈】○しがらみ…「山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」（『古今集』三〇三、『百人一首』）。○崑崙山…中国の伝説の神山。西方にあり、仙女西王母が住むとされた。○かうの殿…かんの殿に同じ。長官のこと。○仏名…懺悔。○あふきるさ…「あふさきるさ」（物事がうまくいかないこと）の誤りであろう（校異参照）。○おこと…御事。あなた。○手つかひ…配備。○御教書…みぎようしよ。將軍の発する命令書。

【注】○「主人公の上京、引きこもり」…あるいは履軒自身の経験を踏まえるか。履軒は明和三年（一七六六）、京都の高辻卿の賓師として、一年間京都に滞在した。その時の様子が『洛内癡囊』という詩文集にまとめられているが、京都での孤独と故郷への思いを詠うものがほとんどである。○蘆のまるや…芦の丸屋。あばら屋のことであるが、履軒『百首贅贅』「夕されば」の歌の注に説明がある。それによると、柱を上で合わせて円錐状に組み合わせた掘立て小屋で、地面に接する部分が円形であることから丸屋と呼ぶと言う。○東宮のさはぎ…史実で指すものがあるかどうか未詳。○玉のかんざし…白居易「長恨歌」で、天上の楊貴妃が玄宗に黄金の簪（金

釵を割いて与える話を踏まえるか。○いはで…警手。歌枕。「言はで」と掛けて用いられる。

一四、くれなゐ

* 恋を題材にした歌物語。迷信を暴く。

むかし初瀬にこもりける女ありけり。物思ひやふか
かりけん、なつみ水くみ、冬のはじめより、よるひるいの
りけるが、春の末にまかでける。わがねがひのおぼつ
かなさにや、つねに物思ひがちなるを、家のせうとあは
れにおもひて、ある朝、出がてに、そのゐたる処をさ
しのぞきてみれば、櫛笥ひきみだして、ひとり鏡にむか
ひてうち涙ぐみゐたるが、硯ひきよせて何やらん手習
ふやうになん。そとも人にあしおとのしければ、や
がて引かくして鏡のうらにさしいれつ。さて、友どち
のとぶらひきにけると聞て、母屋のかたに出けるあと
にて、かの鏡のうらなるものをとりいでみれば、しど
けなくここかしこうちかさねかきたるうちに、墨つき

たどられたる哥(うた*)ひとつありけり。

なげきつつ

いのりし山の(折)かひやなく(甲斐)*

ひとすぢしるき(一筋) 髪(著)のいとゆふ(陽炎)

かぎりなうあはれに思ひなりて、やがて其末にちひさ(限)くかきそへける。(書)

一筋はぬきてもかくせ(抜) ふたすじを(二筋)

結ばざらめや(結) くれなゐ(紅)の糸

これは、しばしの心やりにとてなん、かくはいひけらし。(暫)
後に女これをみて心ときめきして、はらからの手(見)を
だにもみしらで、ひたすらに仏の御つげなりとおぼひ(見知)
て、この歌を楡のかみにおしはりて朝夕ぬかをつくな(上)り。(押)

一月ばかりがほどにや、その男のかたに、さはぎいで(方)
きたり。ややしつまりて後は、よろづこの女のほい(本意)の
ままになりて、やがてうつりすみける。されば、いよ(移)
よたうとみ奉りて、ふたたび初瀬にまうでてかへり(再)

まうししけり。(奏) ささげ物などはそこら法師ばらの目(驚)を
おどろかしけるとぞ。心のうちにはたへがたうおかし(可笑)
かりけれど、さらぬ顔(作)つくりて、はらからのよろこび(喜)
の心ばえに、いとふたむらばかりおくりつかはしぬ。(糸*)
其つつみ紙のうへに、(包)

くれなゐのいとむつまじく おもほゆる(紅)*

神のむすびし ちぎりたえずも(結)

今の世中に神仏のつげてうことは大やうかかるたぐひ(告)
なるべし。(縁)

【校異】○出がてに…中之島本「出かけに」に見える。○かた…中之島本
「うた」。○たどられ…中之島本「たどくれ」に見える。○哥…中之島本
「歌」。○かひやなく…手稿本「かひやなく」に見える。和文集本、中之
島本「かひやなぞ」。○心やり…中之島本「川(心?)やか」に見える。○
いひけらし…中之島本「いひけるらし」に見える。○ときめき…中之島本
「ときめれ」。○おしはり…中之島本「おしははり」。○男のかた…中之島
本「男かた」。○うつり…中之島本「かへり」。○たうとみ…中之島本「た
うを」に見える。○まうでてかへりまうし…中之島本「まうでかへりまか
し」に見える。○そこが…手稿本不明確。和文集本「そこら」。中之島本
虫食い不明確。ここでは手稿本により推測する。○つくりて…和文集本「つ

くり」。○心ばえに、いと…和文集本「心ばえにぞと」。中之島本「心ばえに、いとと」。○つかはしぬ…和文集本「つりはすぬ」に見える。

○おもほゆる…手稿本は「おもふかな」の「おもほ」を見せ消ちにして、横に「おもほゆる」と書く。和文集本「おもほゆる」。中之島本「おもほゆるかな」。ここでは、和文集本に従う。○てう…中之島本「てふ」。

【語釈】○出がてに…出かねて。

【注】○初瀬…現奈良県櫻井市にある長谷寺のこと。○なつみ水くみ…功德を積むこと。『法華経』観世音菩薩普門品に、修行の方法として「採菜汲水、拾薪設食」とあり、それを踏まえて『拾遺集』には「法華経を我が得し事はたき木こり菜摘み水汲み仕えしぞ得し」という歌がある(一三四六)。

【解説】懷徳堂は迷信に反対を唱え、また、仏教にも批判的であつた。

履軒の弟子竹島實山きざんの著書『實山文稿』中の宇野怒田の話は神のお告げを暴く点が「くれなあ」と共通する。

一五、長き夜

* 随筆。作品の制作年は未詳だが、履軒が晩年、悩みを抱えながら生きていたことが窺える。

長き夜のね(寝)られぬままに、年(数多)ごろあまたの物思ひを

かさね(重)しう(憂)さを思ひつづくるに、これはた世のためし(例)にて、年(若)わかきほどは、とかくしてつ(繕)くろひ来ぬるを、さ(去)りしふたとせの間は老のくれにとりかさねて、深き(重)なげき(嘆)をつみにたれば、いよよおひくづれて、身もう(動)ごかず、やがてもともなふべくなん。

白露の ひるま(千る間)をかこつ 朝がほは(朝)
はひまつはれよ わが袖の上に(袖)

などいひてなげきくらしける。おし(惜)からぬ命にはあれど、後の世を露(露)ねがふ心のなければ、さしあたり遠き旅衣(衣)をいそぎ(急)たちもせずかし。

蓬てふ 山はむかし(昔)の 山なれど
しなぬ葉は 今はおひい(生)です(出)

たとひありといふとも、たづぬる心のなければ、よし(言)やいかにもあれ、水草のうきてな(浮)がる年波(流)の今ふた(二)年(三年)とせ世にありとも、ま(目)のあたるみ(目)か四日(三日)すぐる(過)もおなじかるべし。この秋は籬の菊を手まさぐり(弄)にし(同)

て葉末の露を朝夕すひなどしけるが、やや心地さはや
ぎて、ほどへてよみがへりたらんやうにぞ。かならず
しも菊の力にもあらざめれど徳をおぼせて、

いつのまに 年はへにけむ うつつなき
身をしら菊の 露にぬれつつ

【校異】○うさ…和文集本「かさ」。○あたる…和文集本「る」を見せ消
ちにして「り」に直す。

【注】○深きなげきをつみにたれば…相次ぐ妻子の死などを指すか。○菊
…菊の露を飲むと延寿に役立つと考えられていた。

【解説】履軒の晩年の境地

履軒は自らの心境を漢詩や和歌で表現している。それらによると、履軒
は晩年、一方で達観を表現しつつ、また一方では迷いを表現している。達
観については、「儉語欄戒約」（『弊帚統編』所収）、「掩鼻亭後」（『柚園
数記』所収）、「履軒古風」巻四の飲酒に関する数編の詩に見える。一方、
迷いについては、「醉歌行」（『履軒古風』所収）、「越吟」の和歌に見える。

一六、ねのひ(子の日)*

* 子の日の夜見た夢を題材にした歌物語。履軒の視点が興味深い(解説参照)。

子日すと野べに出で、日ひと日松ひきちらし、うた
ひたはむれ、臘月におくられて、やどりにかへりぬれ
ば、いとうじて、やがてねにけり。夜ふくるままに、
思はずもみどり子らおほく入きたり。おみな子とおぼ
しきは、みな赤き衣をきたり。おのこ子は黒みがちな
る。いづれも小松を藍にすりたり。かかる者どもあ
まくらにうちかこみて、くちぐちにさるづりののしる。
沢べのかはづの鳴かはすやうにぞ大かたは舌もとの
ふらで、聞わくべくもあらず。あるは松のさゑだをし
もとにとりて、うはなりうちなんする。「こは心ゑぬも
のかな」といとたへがたくて、うめきけるほどに、夢
はさめにけり。いかなるわざにやとねられぬままに、
つくづくとおもひめぐらすに、かの声々のうちに、や
や年のねびたるがいひたることの耳の底にとどまりた
る、ねんじいだされて、ほとほとかいつけみれば、みな
歌にぞありける。

子日すと 千本の松は 根をたえぬ*

何を千年の (ちとせ) ためしにや引 (ひく)

ことしこそ (今年) ちよの始と (千代) ちぎりてし (契)

よはひを君に (引) ひかれぬるかな

君がため (為) はつねの松は (初子) 引つれて (ひき)

さいの河原に (賽) 瀬ぶみすらしも (踏)

いかなりし (如何) 罪のつもると (積) 白雲の

きえまあらそふ (消) わが身なりけり (我)

ちよ万 (千代) 何をまつらん (はつね) 初子てふ

暮をかぎりの (くれ) わがいのちかも (我)

思ひきや (ちとせ) 千年をふべき (経) 小松原

人より先に (先) かれむものとは

常磐なる (常) 松のみどりの (緑) すべもなく (衝)

森のくつねの (狐) あからびにけり (赤)

若松の (若) わかしと人に (言) いはれつつ

しでの山にや (死出) 生かはるらむ (うまれ)

行末を (待つ) まつとせしまに (間) 子日かな (ねのひ)

あたら千年を (ちとせ) 人にひかれて (引)

今はただ (待) 何をまつらん (待) 姫小松

みどりをのこす (緑) 夕烟かも (煙)

【校異】○あとまくら…中之島本「あとゆくら」。○沢べ…中之島本「沢辺」。○いと…中之島本「は」。○わざ…中之島本「あさ」。○たえぬ…中之島本「たたぬ」に見える。○つもる…中之島本「つもるか」。○ただ…中之島本「だに」。

【語釈】○あとまくら…寝た時の足もとと枕もと。○うはなりうち…後妻打ち。もと、前妻が後妻を打つこと。ここでは非条理な八つ当たりをして叩くことをいうと思われる。

【注】○ねのひ…正月の初めの子の日にする遊び。野外に出て小松を引き、若菜を摘んだ。小松引きとも言う。子の日に関する和歌は例えば以下のようなものがある。「子の日する野辺に小松のなかりせば千代のためしに何を引かまし」(『拾遺集』二二三)、「ゆくすゑも子の日の松のためしには君が千歳を引かむとぞ思ふ」(『拾遺集』二九〇)。履軒『越吟』にも、子の日を題材にした歌が数首ある。

【解説】履軒は自らの居宅を夢の国、華胥国と名付け、華胥国王を自任した(冒頭解説参照)。まさに「胡蝶の夢」の世界に遊んだと言える。そこで、

大きな物を小さく見たり、小さな物を大きく見たり、様々な視点から物事を見つめた(四)「題三夕図」解説参照。本篇はその二つの特徴がよく表れた文章と言えよう。

一七、歌のすがた

* 歌論。内容は、履軒の他の歌論(『百首贅贅』、『遺草合卷』)所収「集撰のさた」と重なる。

『古今集』こそまこと(真)の精選にてこそありけれ。それだに、いかにぞやこの集には入けんと思ひたるふる歌十首ばかんも。されば、この集にもれたる古歌は、いかなる名人なりとも、それは糟歌なるべし。『後選』は、この糟歌をひろひあげて、この集の柱とすめれば、さばかりの名人もひかりをうしなふわざなりや。其世の歌などは、この糟に水をさしいれて、ふたたびしぼりたる酒にやあらん。いつのころにやありけん、

『後選』より後の詞は皆用ゆべし。『古今集』の詞は今の世によろしきをゑらびて用ゆべし」とさだめ給ひしときく。おろかなる心にはいとかしこけれど、これ

はきざはし(階)の一級たがひぬとぞ思ふ。『万葉集』は今によろしきをゑらべ。『古今集』はゑらぶにおよばず」とこそさだめ給ふべけれ。およそ『古今集』に『万葉』の歌おほく入たり。みな後の世によろしきをゑらびてのせたれば、今さらにゑらぶことはなかるべし。

およそ『古今集』に載たる読人しらずの歌なん、いと妙なる歌おほし。すべて、たくらぶれば名ある人の歌にまさるかたなり。これにはいとふるきもあるべし。ところどころに「人麻呂が歌なり」「赤人かな」とうたがひたる裏書もおほかり。『後選』の読人しらずはすべてわろし。『古今集』より後の歌なるべし。これにても世のくだりたるさまをしるべし。いで、かの糟歌よ、糟とはいへ、およそは『後選』の比の歌よりまされれば柱とたのみしかひはありけり。『後選』より後の選集は大かたは『後選』のおもむけにて次々におとろへくだるめり。たとへば、清水寺の石壇をまがりくだるがごとし。一級ごとにおのが身もひきくなり、うちのぞむ山

も林もせば(葉)くなりもてゆく。そが中(中)に『新古今集』の
みは、やや(様)やうかはれり。それは(別)べちに(言)いふべし。こ
こには(如何)いかで。

近き御代には選集のこと絶たり。これはよくこそ絶
たれ。さらずば、いづくまでく(下)だるべきや。石壇はは
やく(崩)づれて、地の上になりたるものを、今さらは井
をほり池をうが(穿)つならで(下)はくだるべきかたなし。

序歌は今の世にはほろ(滅)びにけり。いづれの御代にか、
かかる禁制をたて給ひしやあらん。いといぶかし。から
歌には「比(言)」といひ、「興(言)」といひて、ことに貴ぶこと
なるを。枕ことばも今はいとすくなし。『足曳の山』「玉
笥のふた」の外はあらず。これもほろ(滅)びたりといふべ
し。縁語は歌の常なるをそれさへにくみて用ひぬ人も
ありとかや。

序もなく枕もせずたとへもあらで、ひたぶるにわが
おもひのみを(思)のべたるをただこと歌といふめり。から
歌には、これを賦といへり。六義のひとつなれば、あし

しとはいふべからず。されば近ごろの歌(歌)よみは
ただことを歌の骨髓なりと思ひてや、もはらこれをよみ
けらし。百首まれ千首まれ、ただことならぬ歌はなし。

されど、いにしへ人の序枕にて歌の半を埋みて其しも
にはつかにわが思ひを(思)のべたるやうのことなどをも
もはらただことにいひいだせば、文字の数あまりて
心たらず。ここにてひたすらにことばを添(言葉)て三十一字
にみちたらはす故になん、むだしきことばおほくなり
もてゆきて、老のくり(繰)ごとのやうにきこえて歌ともおも
はれぬものぞおほき。そもそもいにしへよりいひつた
へし六くさのうちに(種)て唯一くさをまもりて五くさを
すてよとは誰かいひは(言)じめけむ。又、ただこととは縁
語のありなしにはかかはらぬことなるを、かの縁語を
にくむ人々は、縁語さへなきをただこととおもひけら
し。これはさらにことたがへり。

序枕のほろびたる其はじめを思ふに題歌の世にひろ
ごりたる故にやあらん。題歌には、序枕は用ひがたし。

かくておのづからうつりゆく世のさまにこそ。また思ふにかの心の誠てふことを思ひひがみてなん。またもろこしの「思無邪」てふことまでをひがみにひがみて、
*聞たがへたるにもやあるらん。また、女などは舌とに歌よむをぜにすれば、序枕など思ひめぐらすひまもなしや。ことに返し歌などすみやかならでは興もさめぬべし。かかることも、おのづから男の口にもうつりぬべし。

かなしきをかなしといひ、うれしきをうれしといふに、序枕縁語などとりまはしてよくわが心をのべたるは、すなはちわが誠なるべし。それを誠にうとしとおもふはいとひがことなめり。かの誠をうしなふとは世々の七夕天河の歌なるべし。それも七夕天河をひきつけてわが思ひをのべたるは「比」「興」の類にて、わが誠だにあらば難なかるべし。うしなふとはいふべからず。「思無邪」もしかり。「思ひ」とは情なり。喜怒哀懼愛惡欲を七情といふ。歌は物をかりて思ひをのぶるもの

なれば、かならず七情にもることなし。七情なきは歌にあらず。今の題歌は題の意をいひかなふるをぜにすれば、時としては七情のうちひとつもなき歌あり。
これはいかなるものにや、しりがたし。

穩とおよそむつかしげなることあるはふることなどとりいれてそれをかどかどしからず、ことばよくとのひてあやうからぬをほむることばなめり。寒を「さむし」といひ、熱を「あつし」といふを穩とするにはあらず。今の世にはさしもなきことをいひて、唯そのことばのなだらかにて耳にさはらぬを穩と名づけてよろづの歌をほむる詞とおもへり。かかる穩の字を的にかけて人に射さする、中むかしの人のひが教へなるべし。この教にしたがふ人の歌はいつにても牛の涎と流るめり。

今の世にやんごとなきあたりの御会に年わかき人のちからをいれていとよき歌になひいだしたらんには、かたへの人かならずおさへていださぬこととなん。さ

らでは、年ふり位たかき人々の顔の色のあからびわたらんがいとおしきなるべし。されば、常々にもよからぬ歌のかの穩にして難もなきをよみならふを秘伝とすめり。かかる世にははじめより歌よまぬぞよき。

この外に、女ぶりのかすめ歌てふものあり。すべてをみなはよはよはとしてものごとたどしきをならひとすめり。常のことばつきもただかすかにいひさし、たしかにはいひもさだめずかし。されば、歌よむにも、ことわりあきらかにすがすがしうおさまりたるを、おとしき詞とおのが口よりはうちいづべうもあらず。薄雲の月をかくしたらんやうにほのかにいひかすめたるをよしとおもへり。女なればさもあるべきことにこそ。梅花のほひことに風にさそはれて袂をそむるばかりにて、其木のもとはいづくぞと心まどひするやうなるぞ、かすめ歌のいとすぐれたるなめり。

かかるふりは小野小町よりや、はじまりけむ。これより後の女の歌みなしかなりけり。これを女ぶりとて

べちのこととて春霞立へだてたるぞいとよかるべき。男歌とてはさらにいふべくもあらず。よのつねのことなれども、かの女ぶりにむかひては男ぶりと名づけいふべし。このけちめをよく思ひてさだめたる人は昔よりなかりしにや。ほとほとおのこの歌にもまじりきにけり。『後撰』『拾遺集』よりぞ、この風世を逐て盛に吹すさみぬる。また其中によき歌も多かれど、すべて歌の風は昔にかはりぬ。ただなだらかに花やぎたるのみをよき歌と思ひけらし。相聞の歌などはおのこのよみたるも女むきの歌なれば、かすめたりともけしうはあらじを、よのつねの歌にはいと口おしかるべし。其比にても西行法師一人はこの風にくみたりとみえたり。

又、近き世に縁語をにくむてふ歌人はもとこのかすめ歌をさけたるはいとよけれど、世の常の縁語までをあししとてはらひすてたるはいとかたくなしきや。かすめは縁語のひとつろびころびたるものにて、おのづか

ら其けぢめあるべきを、ひたすらにいふべきことかは。
縁語をこのむ人はこのむに溺れ、にくむ人はにくむに
ながれ、中筋なるよきわたり瀬はわたる人ぞすくなき。
「立わかれいなばの山」は縁語にてたしかなるおのこ
歌なり。「わが身世にふるながめ」はをんなぶりのかす
め歌なり。このふたつをおしたててもろもろの歌をか
うがへば、そのけぢめは誰にてもまぎるるまじきにぞ。
ただ女は女ぶりを守るべし。男はこれをさけたる
ぞよき。

* 以下、手稿本は貼り紙して足す。

心ある人々にはみないへりけるは『新葉集』こそい
とめでたき選なれ。この前のよよの代々の選にははる
かにまされりとなん。このことばにはたれもたれもう
ちなびきてたがふべくもあらぬを、されどまたあた
ぬことこそありけれ。歌のすぐれたるとは建武のみかど
の御製にこそあなれ。このみかどは英才ましまして、

くだれる世の風にそまず、遠く延喜以上のすがたにた
ちかへりたまひぬ。されば、これを見奉りたる人は皆
きもをけして、「こはすぐれたる集なり」と思ふなり。
すぐれたるはこのみかど御一人なめり。その外はみこ
たちをはじめて、みなくだれる世のすがたなめり。大
かたは牛の涎にこそ。されば、御門の御歌のよきのみ
ぞ、集のよきにはあらずかし。

【校異】○よろしき…手稿本、中之島本「よろし」。和文集本は右に「き」
を補う。ここでは和文集本に従う。○給…中之島本「ぬ」。○さだめ給ふ
べけれ…手稿本「さめ給ふべけれ」。和文集本は右に「だ」を補い「さだ
め給ふべけれ」にする。中之島本「さめ給ふべければ」。ここでは和文集
本に従う。○まされば…中之島本「まされるは」。○次々に…中之島本
「次々には」。○そが…中之島本「その」。○べちに…手稿本では「古今集
にて」を見せ消ちにして直す。○くずれて…各本「くずきて」に見えるが、
内容から「くずれて」にする。○たて給ひし…中之島本「たてぬひし」。
○貴ぶ…和文集本「貴とぶ」。○にくみて…中之島本なし。○をただこと
歌…中之島本「をただ」なし。○されど…中之島本「されば」。○いひつ
たへし…中之島本「いひてこし」。○人々…中之島本「人ら」。○聞…中之
島本「きき」。○うとし…中之島本「ことし」。○さらでは…中之島本「さ
ぞては」に見える。○たかき…中之島本「貴き」。○常々にも…中之島本
「常ににも」。○常のことば…中之島本「常ののとは」。○袂…和文集本「袖」。

○かすめ歌…中之島本は「かすめ」と「歌」の間に「る」があるが訂正している。○また…中之島本なし。○はらひすてたる…中之島本「はらひまけたる」。○中筋なる…中之島本「中筋なり」。○ぞすくなき…中之島本「うすくなき」。○よよの代々の…和文集本「代々の」を見せ消ちにして「代々の」に直す。○遠く…中之島本「遠くなれ」。

【語釈】○たくらぶれば…くらべれば。

【注】○から歌には「比」…『詩経』の風・雅・頌、賦・比・興を六義という。風・雅・頌は、詩の性質・内容からいい、賦・比・興は詩の表現・修辭の上からいう。賦はその事を直叙するのいい、比は物に比方していうのいい、興は事を物に託していうのいい。六義は『詩経』序に説明があるが、その影響で『古今集』仮名序でも歌を六種に分類している。六義と六種とが対応するという説もあるが、履軒は対応しないと考えていた（『古今二微』『六種微』）。○近ごろの歌よみ…小沢蘆庵らを言うか。○ただこと…直言・徒言。物にたとえず、ありのままに詠むこと。前々注、六種の一つ。○文字の数あまりて心たらず…『古今集』仮名序の在原業平評に「その心あまりて言葉たらず」というのを参照。履軒は、この標語は貶めた言い方だとし、「ことばすくなくして、ころあまりあり」（余韻がある）と直すべきだと言う（『古今二微』『六仙微』）。○題歌には、序枕は用ひがたし…未詳。○もろこしの「思無邪」…『論語』為政篇で、孔子は『詩経』を一言で言う「思无邪」だと言う。「思無邪」は『詩経』魯頌、駉篇に見えるが、そこでは「思」は助字。○七情…『礼記』礼運篇に見える。七情を歌の本質とするこの前後の言葉は履軒の歌に対する考えを端的に表現している。「集撰のさた」（『遺草合巻』）にも、同様の論が

見える。○「題歌には情が見られないとの説」…「集撰のさた」（『遺草合巻』）にも、同様の論が詳しく見える。○はじめより歌よまぬぞよき…以上、履軒の当時の和歌界に対する痛烈な批判である。○かすめ歌…「かすめ」は、『百首贅々』で「掠め」という字を当てている。履軒は、はっきりせず、遠回しに表現する歌をかすめ歌と呼んでいる。かすめ歌は女の歌としては評価できるが、男の歌では相聞歌以外は認められないと履軒は言う。以下、『百首贅々』に見える用例。九「花の色は…」の歌（小野小町）。

「抑女ハ何事ニヨラズナダラカニヤサシキヲ宗トスレバ歌モ只ナダラカニイヒツバケテ男歌ノ如クヒシ貼トイヒカタメタルヲ嫌フナリ。故事ヲ用ルモサシテソレトモ聞エヌヤウニ少ツ、言ヒ掠メテ其意ヲ思ハスルナリ。…サテ小町ハ女歌ノ最上ニテ言ヒ掠メノ元祖ト云ベシ」。*ここに「歌のすがた」「かすめ歌」の内容がそのまま見える。「言い掠め」という言い方に注目。六〇「いく野ハ往野ヲ掠タルナリ」。七四「初瀬に始テイヒヨル心ヲ掠メタリ…コレハ女流ノ掠メ歌ニナラヒタルナリ」。九六「花さそふ…」の歌。「コレハ言掠メノ甚シキ歌ナリ」。九七「こぬ人を…」の歌。「コレハ我女ニナリテ詠タル歌ナリ。掠タリトモ苦カラズ」。一〇〇「百敷やふるき軒端…」の歌。「コレモ掠メ歌ナリ。ヨキコトニ非。…」*以下、男歌に改めているのが興味深い。○立わかれいなばの山…在原業平「立ち別れいなばの山の峯におふるまつとし聞かば今かへりこむ」（『古今集』三六五）。○わが身世にふるながめ…小野小町「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」（『古今集』一一三）。なお、「集撰のさた」（『遺草合巻』）にも、かすめ歌について本書と同様の論が見える。○『新葉集』…「集撰のさた」（『遺草合巻』）にも、『新葉集』について同様の論が見える。「建武のみかど」とは後醍醐天皇のこと。○延喜…九〇一〜九二三年。『古今集』のできた時代。

【解説】履軒には『古今二微』という著作もある。『古今集』仮名序の六種と六歌仙について自らの疑問を提示している。六種（そえ歌、かぞえ歌、なずらえ歌、たとえ歌、ただこと歌、祝い歌）については、中国の六義（風賦比興雅頌）とは対応関係はないという説を主張し、六歌仙については、在原業平と小野小町の評価について異議を唱えている。

一八、かすめ歌

* 評論に創作を付す。内容は「歌のすがた」と重なる。かすめ歌については
一七「歌のすがた」の注を参照されたい。

中昔より女ぶりのかすめ歌てふものあり。すべて女
はよはよはとして物ごとたどしきやうなるをなら
ひとはすめり。常のことばつきもただかすかにいひさし
たるやうにて、たしかにはいひもさだめずかし。され
ば、歌よむにもことわりあきらかにしかじかといひお
さめたるをおおしき詞よとておそれて口よりはいひ
いだすべうもあらず。ただ薄雲の月をかくしたらんや
うに、ほのかにいひかすめたるをよしと思へり。女な
ればさもあるべきことにこそ。梅の花のほひことに

風にさそはれて袖にしむばかりにて、其木の本はいづ
くぞと心まどひするやうなるはかすめ歌の最上なるべ
し。

さて、その風は小野小町を祖とやいふべき。この後
の女の歌はみなしかなり。これ女ぶりとてべちのこと
とせばいとよからんを、このわかちを思ひさだめたる
人、むかしよりなかりしにや、ほとほとおのこの歌に
もまじりきにける。『新古今集』のころにはこの風盛に
なりて、まだよき歌も多かれど、すべて歌の風昔にかは
りたりや。相聞の歌などは女むきの詞なれば、おのこ
のよみたるも、かすめたりとも、難はなかるべし。よの
常の歌にはいとくちおしきや。其ころにても、西行法
師一人は是をにくみたりと見えたり。

近き世の縁語をにくむてふ歌人はもとこのかすめ歌
をさけたるならん。それはいとよけれど、よの常の縁
語までをもあししとするはかたくなしきわざならん。
かすめは縁語の一転したるものにて、おのづから其わか

ちあるべきを、これに心つかざりしにや。このむ人は
(好) (憂) (憎) (流) (少)
このむにおほれ、にくむ人はにくむにながれ、中筋な
(良) (渡) (渡) (少)
るよきわたり瀬をさしおきてわたる人すくなし。「立わ
かれいなばの松」は縁語にてたしかなるおのこ歌なり。
(確) (男)
「わが身世にふるながめ」は女のかすめ歌なり。これ
(推) (諸々) (考)
をおしてもろもろの歌をかうがへば、このわかちは誰
(分)
にてもよくわかるることなり。相聞の歌のみは、とま
れ、かくまれ。

年比むつまじき妹背ありけり。いかなりけん、男の
(互) (睦) (如何)
心軽きことありしにや、たがひに物いひかどかどしく
(言)
なりて、つゐにおひうちてけり。程へて隣の刀自物詣
(逐) (寒) (経) *
の帰るさに、かの女のがり立よりてとぶらひし。さて
(如何) (寄) (訪)
「いかにや」と問ければ、女涙おとして、おのが下着
(解) (書)
の袖をときて、それに歌かきて「これかの人にとどけ
(屈)
たまはれ」とていだしける其歌。

出ていにしなにはのことは忘れつつ
(去) (何は・難波) *

(ひとり) (歌馬・見ぬめ)
独 みぬめの 浦にわびぬる *

(男) (呼) (返)
おとこ此を見て、「われもさこそ」とて、やがてよびかへ
しけるとなむ。

【校異】○梅の花の…中之島本「梅の花は」。○かはりたりや…中之島本
「かはりたるや」。○つゐに…中之島本「つゐぞ」。各本この後に「し」ら
しき縦線が見える。○女のがり…和文集本「り」を見せ消ちにし」とに？」
に直す。「もとに」と読んでいるか。

【語釈】○いひさしたる…中途半端に言った。○ほとほと…ほとんど。○
刀自…主婦。

【注】○なにはのこと…あれはこれはのこと。万事。「なには」は「難波」
に掛ける。○みぬめの浦…敏馬の浦。摂津の歌枕。「見ぬ」に掛ける。履
軒の恋歌を集めた和歌集『風懷百首』に「わびぬればあふうれしさに年月
をみぬめの浦のうらみだにせず」(三八)という歌がある。

* 手稿本、中之島本は以上十八篇のみ。『履軒先生和文集』の「華胥
嘆語」にはこの後に「百首考」「破腹巻記」の二篇がある。

一九、百首考(『百首贅賛』にも所収)

* 『百人一首』の由来を説く。

百首の巻ばかりことわりがたく疑ひおほきものは世にもあらじ。『明月記』に、「文暦二年中院障子色紙染筆自天智天皇至家隆雅経」といへる一条の外には証とすべきものは露ばかりもなしや。

すべてふるき歌ぬしおほくたがへり。後の歌は歌ぬしはたがはねど、位つかさのかきさまおほく例にしたがはず。歌の文字たがひたるもあり。いづれにも定家卿の筆とおもほえずなん。今の世に伝はりたる小倉色紙にはみな歌ぬしはあらず。たが書そへたるにか。この卿のしろしめしたることにあらぬにや。

障子の料ならば二十首三十首にてもありぬべきを百首とはいかでさだめけむ。文字のかきさまこの色紙は例にかはりて一もじづつはなれてするとかきながしたる筆ぞなき。今の世にてをさな子に教ゆる「いろはにほへ」てふによく似たり。かれこれ見そなはずに筆の心ばへ一首づつにかはりて一人の筆とは見えずなんある。また色紙の中には反古をうちかへしてかきた

るもあり。いかなれば中院入道のいやいやしく定家卿の筆をねがひてあさましう反古の紙出して歌かかせけむ。

またこの歌ども人ひとりづつ其生涯第一の秀歌をゑらび出たるものとはみえず。父俊成卿のおほき秀歌の内をとらで、さしもなき歌をこれにはいれたり。みづからのめかくいひもてゆけば、疑ひのかぎりにこそ。ある人のいへらく、元龜天正のころ、みやこわたり

の兵乱もしづまり、主上も近江より帰りおはします。月卿雲客も国々よりかへりまうできて、世中おだしくなりぬるに、長き旅のすまゐよりのほり来ませしかば、よろづの調度何くれとゆきあはねば、家々にひめおきたる物どもをおしみもあえずとり出して銭にかへけり。されば、物がたりの草紙、絵の巻物、ふるき色紙など、いとおほく世にいでける。

このころ西京に何がしと聞ゆる伽羅あき人ありけり。かねてはかかるたぐひの物をもものしけるが、めでた

き色紙はよきしろをゑなどして、家とみさかへける。
その中にうりゑぬ物こそいとおほくありけれ。それは
をさな子の手本とて、その親はらからのかきたる手は、
よくまれあしくまれ、をさな子のうつしやすきをぜに
してつぶつぶと書たるなり。見ばえなき物なれば手は
よきもあれど、さらに買人なし。かの伽羅あき人はさか
しらものにて、これをつねにひめおきて、ひとりゑみ
しておりける。

其数二三百にもなりぬるころ、いでやとて古へ今の
人ごとに唯一首をゑらび出て百首を一箱におさめて「こ
れなん定家卿の小倉山荘にてかきたまひしなり」とて
もろ人には見せもやらず、伊勢国司がりにきて「かく
なん」とてそそのかしける。国司これをみて大ひに
めでさはぎて、「かかる物はこの卿のながれをくむらん
人のうへもなき宝なめり。この手の神さびたるさまは、
今の世にあるべうもなし」とて、数の宝を出して、たば
ひけり。かのさかしらはとくつきて帰りぬ。

さて国司はこの百首を一双の屏風におしはりて朝夕
ながめおりける。ある日、牡丹花老人とぶらひきて、
この屏風を見ておどろきさはぎて、「世の末にかかるた
からはいつこよりわきいできにけむ。後の世の思ひ出
に、いかで一月ばかりもとどまりてよく見ほすことの
ありてむや」と涙おとしてうらやむめり。「それはやす
きほどのことよ。このひとつをかしてむ。君の心ゆく
ばかり見ほして、今ひとつはとりかへて、またかすべ
し」とのたまふ。この老人かぎりなくよろこばひて、
かりて帰りぬ。

いくほどもなくて、国司はほろびにけり。其時、この
屏風もともに烟と立のぼりにけり。このころまで都に
ては、さしもしりたるものはなかりしを、こたびたが
聞つたへけん、あたり世の宝うせにしとてなげくもあ
り。または「其半は牡丹花がもとにあり」などいひさは
ぐを、ことこのむ上達部衛部のつかさなど、我先にも
ゆきて見る。見る人ごとに一首づつはとりていぬめり。

老人は涙こぼしておしめども、もとおのが物にしもあ
らず、ぬしなき宝なれば、あらそふべくもあらずかし。
ひと日ふた日がほどに屏風はむなしくぞなりける。今
の世までつたはりしはこの色紙にてぞありける。

国司も老人も眼のあきらかならざりしにや、かのさが
しらにぬかれにけりとなん。されば、この百首をかき
つらねて一卷となして歌ぬしを書そへたるは、これ
をうりにいきし時の目録にてぞあるべき。みなかのあき
人のさかしらなればたがひたるはさるべきにや。もも
てふ数もかれおぼろげにさだめけらし。そもそもをさ
な子の手本は手ならふためにて、歌には心あらず。さ
れば親はらからのこれをかきてつかはすに、いやいや
しう集なんととり出てかくものにはあらず、ただ何と
なく耳の底にとどまりたる歌をくちずして手にまかす
ものなれば、文字のたがひたるもあるべし。

かななの心ゆかざるもおよそ歌の姿すなほにてたけ
たかく、さらさらとよみくだして心ゆくやうなるは

みなよき歌にこそ誰が耳にもとどまりけれ。さればこ
の百首はみなよき歌なるぞ。そが中にわる歌のまじり
たるもあれど、それは心こと葉の疵にてこそあなれ。
姿はみなよかれければ耳にとどまりけらし。ことさえ
くからめきたる歌、くすしめきたる歌、かみしものつづ
きおぼつかなくてそらにはおほえがたきやうの歌は
ひとつもあらずかし。さればみなよき歌とぞいふめり。
これぞこの巻のはからざるよき教へなるべし。また手
本なれば、反古をかへしてかきもすべし。
かくてもろもろのうたがひは春の氷の日影にあたり
たるやうになん、ひたひたとときつきぬ。されどかく
いひし人は誰としも聞さだめたることはなし。外に証
もなければ疑もて疑ひをことわるにぞありける。まこ
としかりや、あらずや。

【校異】*以下、すべて『百首贅贅』所収の「百首考」（福島理子翻刻）と
の校異。

○百首の…「この」。○あらじ…「あらじかし」。○雅経…「雅経卿」。○
ふるき…「ふるきは」。○なん…「なむ」。○二十首…「二」。○百首とは

いかで…「いかで百首とは」。○けむ…「けん」。○この色紙は…なし。○筆ぞなき…「筆はなし」。○かれこれ…「これかれ」。○筆…「手」。○見えなん…「みえずなむ」。○いやいやしく…「いやいやしう」。○ねがひて…「ねがひたるに」。○けむ…「けん」。○またこの…「又かの」。○ゑらび…「選び」。○みえず…「見えず」。○これには…「これに」。○かざり…「限り」。○ある人の…「ある人」。○おだしく…「おだしう」。○のぼり…「帰る」。○何…「なに」。○けり…「ける」。○いで…「出」。○この…「其」。○西京…「西の京」。○色紙…「色紙など」。○その…「が」。○うり…「売」。○物…「色紙」。○その…「其」。○をさな子…「をさなこ」。○ぶつぶ…「ぶらぶら」。○買人…「買人は」。○古へ…「いにしへ」。○なん…「なむ」。○たまひ…「給ひ」。○そのかし…「そのかし聞え」。○さまは…「さま」。○宝…「たから」。○けり…「ける」。○ある日…「ある日みやこより」。○見て…「みて」。○たから…「宝」。○いかで…「あはれ」。○ありてむや…「ありてんや」。○うらやむめり…「うらやめば」。○見ほして…「見ほしてよ」。○今ひとつは…「今ひとつはまた」。○またかす…「まいらす」。○よろこぼひて…「悦ひて」。○いくほども…この前に「この後」あり。○国司は…「国司」。○其…「その」。○この…「ひとつの」。○都…「みやこ」。○けん…「けん」。○其…「その」。○牡丹花が…「牡丹花の」。○衛部…「衛府」。○先にもゆきて見る…「さきにといきてみるなり」。○見る…「みたる」。○はとりて…「取て」。○老人…「牡丹花」。○物…「もの」。○かし…なし。○なり…「なりに」。○今の世…この前に「このかしこに」あり。○つたはり…「伝はり」。○あり…「有」。○老人…「牡丹花」。○なん…「なむ」。○たがひたる…「たがひたる事ども」。○歌には…「歌にはさしも」。○朽ちずして手に…「うちずして筆に」。○みな…「皆」。○耳に…「耳には」。○そら…「空」。○

ひとつも…「ひとつもこの巻には」。○歌…「歌なり」。○この…なし。○うたがひ…「疑ひ」。○人は…「人を」。○ことは…「ことも」。○外…この前に「また」あり。○疑…「疑ひ」。○にぞ…「こそ」。

【語釈】○月卿雲客…公卿、殿上人のこと。

【注】○『明月記』…藤原定家著の漢文日記。この記述が『百人一首』は定家の撰だという根拠になっている。原文は「予本自不知書文字事。嵯峨中院障子色紙形、故予可書由彼入道懇切。雖極見苦事愁染筆送之。古来人歌各一首、自天智天皇以来及家隆雅經。」（『明月記』文暦二（一二三三）年五月二十七日条）。意味は「自分は字が下手だが、嵯峨中院の障子の色紙形を書くように、彼の入道（定家の息子、為家の舅である宇都宮頼綱）に懇願され、極めて見苦しいこととは言いながら書き送った。古来の人の和歌を一首ずつ、天智天皇から家隆・雅經に及ぶ。」○ふるき歌ぬしおほくたがへり…冒頭部の、天智天皇、持統天皇、柿本人丸、猿丸の歌などと言う（『百首贅賛』参照）。○さしもなき歌…「世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」を言う。○みづからの…「来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ」を言う。○元龜天正…一五七〇—一五九二年。織田信長、豊臣秀吉の時代。

二〇、破腹巻記

* 破れ腹巻を子孫に遺す理由を書いた記。腹巻とはこの場合、鎧の一種。履軒『刀甲辨』『甲辨』に、鎧を三種に分け、下等のものを腹巻と呼んでい

る。なお、懷徳堂文庫の新田文庫に軸物の「破腹巻之記」がある。

およそ泰平の世に当りて甲冑はまことに無用の物なり。まして、文儒隠淪の流にして禄仕の身にもあらねば、かれはた何の用あらんや。然るにわれこのやぶれ腹巻をたくはへおきて子孫に遺すことは、もとより安くして危を忘れざるの義なれど、またすこし心ばへなきにしもあらずかし。

かかるやぶれ腹巻はまさかの時に何の用をかなさんと人みな思ふべし。是しからず。およそもののふの大切とすべきは初陣なめり。初陣に勇敢なれば、其身一生衆におとるほどの不覚はなきものなり。初陣に微漏なれば一生武勇の功は出来ず。すべて初陣に甲冑のゑらびをして、「やぶれ具足は鋒鏑をふせがず、あやうし」など思ふ心ばへにてはとも出陣はなるものにあらず。出陣したりとも何事をなしゑんや。何にても手にふれたるものを身にまとひて飛出る心ならでは武功はなしがたし。戦場は死地なり。死地にゆくにかねて生路を

求むべからず。具足よしとても、しぬる命なれば死す。あしとても、しなぬ命なればしなずして功をあらはす。千年万年の後兵革の世にあたりて、わが百世の孫、もし武勇の器ありて出陣せば、このやぶれ腹巻を着て、初陣の功を励むべし。勇敢の気ありとも、戦闘になれぬ者のみだりに先をあらそひて、大死すべからず。しばらくひかへて、戦半なるを待て敵味方入みだれたる時、鏑を提げてこたかき処に登りて遠見すべし。大将が物主とおぼしくて年わかく物具きらびやかなる敵あるべし。それを無二無三に突倒し首を取て軍功をあらはすべし。あなかしこ、名乗あひ詞戦すべからず。さて其物具を分捕して、やがておのれが着料とすべし。指物も此敵のを一生用ゆべし。一生の勇怯も毀誉もこの初陣にて卜すべし。これもののふの心を定むる大切な事なり。わがやぶれ腹巻をのこしおくはこのためなり。まことはよき物具をあたへんためなり。もし今よりよき具足を調へおかば、子孫数十代の間には必質屋

の蔵に入べしとぞ思ふ。また前にいへるごとく、この
(感) やぶれ腹巻を心もとなく思ふ者ならば即時に主君に暇
(を) をこひ在郷にいりて鋤鋤にかへ農民となるべし。武功
のことは思ひよるまじきものなり。

右告百世孫

乃遠祖履軒幽人中井朝臣

寛政庚戌仲秋*

【語釈】○心ばえ…事情。○鋒鏑…矛先とやじり。○兵革…戦争。○物主
…ものぬし。戦陣での部隊長。

【注】○安くして危を忘れざる…『易経』繫辞下伝に「君子は安くして危
を忘れず」とある。○寛政庚戌仲秋…寛政二年(一七九〇)。

【解説】履軒の自意識

履軒は、仕官に応じず一生在野で過ごし、隠逸的境地に対する憧れも表
現している(『履軒古風』)。人付き合いを好まぬ偏屈というのが履軒につ
いての一般的評価である。だが、本篇を見れば、武士としての自意識を有
し、最後の署名に「朝臣」とあることから貴族に対する憧れも有していた
ことが伺える(『昔の旅』で自分たち兄弟を文章博士に仮託していること
も同様の例と言える)。また、多くの経世論を残していることから、決
して出家人としての行動していた訳ではないことがわかる。なお、履軒に

は、「刀」と「甲(甲冑)」とについて考証した『刀甲辨』という漢字カナ
交じり文の著作もある。

謝辞 本稿の執筆に当たり、大阪大学の飯倉洋一先生、四天王寺国際仏教

大学の矢羽野隆男先生、大阪府立工業高等専門学校の井上千鶴子先
生にご教示を賜った。ここに記して謝意を表す。

(大阪府立工業高等専門学校助教教授)

口絵解説 【博山香炉】(新田文庫所蔵)

中井履軒作と伝えられる楽焼きの香炉(『懷徳堂考』下巻七九頁)。

手前の身の部分に香を入れ、富士山形の蓋を被せると、蓋に開けられ
穴から煙が立ち上る仕組みになっている。蓋の大きさは、縦16・5cm、
横26cm、高さ10cm。博山とは富士山のことだが、古来、中国人が憧れた
仙山を指すとされる(『夢路草枕』参照)。

中井履軒は、安永四年(一七八一)、米屋町に引っ越し、居宅を華胥
国と名づけた(『三「華胥国記」参照)。華胥国とは『列子』黄帝篇に見
える夢の中の理想国である。この夢の世界で、仙山に見立てた香炉を
燻らせながら、履軒幽人は何を考えたのであろうか。